

平安京左京七条三坊五町

平安京跡研究調査報告

第15輯

財團法人 古代學協會

昭和60年

## 目 次

はじめに	1
<b>第1章 調査の経過</b>	
<b>第1節 A区の調査</b>	3
<b>第2節 B区の調査</b>	7
<b>第2章 造構と遺物</b>	
1) 磐石列 (12)	10) SE132 (22)
2) 集石造構 (14)	11) SE113 (22)
3) SX32 (14)	12) SX101 (23)
4) SBI2 (16)	13) 集石造構周辺出土の羽釜 (23)
5) SE111 (16)	14) SK38出土土師皿 (24)
6) SE52・53・54 (17)	15) SK04出土墨書き陶器 (25)
7) SE139 (18)	16) 土馬・ミニチュアカマド (25)
8) SE143 (19)	17) その他の遺物 (26)
9) SE130・131 (21)	18) 瓦類 (28)
<b>第3章 北小路と条坊復元</b>	
おわりに	33
	35

## 図 版 目 次

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 図版第1 上：調査地遠景          | 図版第12 羽釜出土状態        |
| 下：A区調査後全景             |                     |
| 図版第2 上：A区調査後全景        | 図版第13 A区南東部大甕検出状態   |
| 下：SB12                | 図版第14 A区北部集石・大甕検出状態 |
| 図版第3 A区南側石列           | 上：全景                |
| 図版第4 上：SX17・28        | 下：細部                |
| 下：SX32・33             | 図版第15 上：SX28        |
| 図版第5 B区調査後全景          | 下：SX33瓦出土状態         |
| 図版第6 SE139            | 図版第16 上：SK35        |
| 図版第7 上：SE131          | 下：SK41              |
| 下：SE138               | 図版第17 上：SK36土器出土状態  |
| 図版第8 上：SE54           | 下：柱根検出状態            |
| 下：SE130               | 図版第18 左：SE139出土遺物   |
| 図版第9 上：SE48           | 右：SE131出土遺物         |
| 下：SE53                | 図版第19 A区出土羽釜        |
| 図版第10 上：SK44, SE45・46 | 図版第20 土馬・灰釉陶器・青磁    |
| 下：SE20                | 図版第21 軒丸瓦           |
| 図版第11 上：SE110         | 図版第22 軒平瓦           |
| 下：SX101               |                     |

## 挿 図 目 次

第1図 発掘調査地位置図	1	第21図 SE139出土遺物実測図	20
第2図 A区第1検出面実測図	3	第22図 SE143実測図	20
第3図 A区第2検出面実測図	5	第23図 SE143出土遺物実測図	20
第4図 A区第3検出面実測図	6	第24図 SE130・131実測図	21
第5図 B区第1検出面実測図	7	第25図 SE131出土遺物実測図	21
第6図 B区第2検出面実測図	8	第26図 SE132実測図	22
第7図 B区第3検出面実測図	11	第27図 SE132出土遺物実測図	22
第8図 土層観察図	折込	第28図 SE113実測図	23
第9図 A区北部集石及び 礎石列実測図	12	第29図 SE113出土遺物実測図	23
第10図 SX32実測図	15	第30図 SX101実測図	23
第11図 SK01, SX8・9・11 実測図	15	第31図 SX101出土遺物実測図	23
第12図 SX27実測図	16	第32図 集石周辺出土羽釜実測図	24
第13図 A区北部集石内出土 遺物実測図	16	第33図 SK38出土遺物実測図	24
第14図 SB12実測図	17	第34図 SK04出土遺物実測図	25
第15図 SB12出土遺物実測図	17	第35図 土馬実測図	25
第16図 SE111実測図	18	第36図 その他の出土遺物 実測図(1)	27
第17図 SE111出土遺物実測図	18	第37図 その他の出土遺物 実測図(2)	28
第18図 SE52~54実測図	19	第38図 軒丸瓦実測図・拓影	29
第19図 SE54出土遺物実測図	20	第39図 軒平瓦実測図・拓影	30
第20図 SE139実測図	20	第40図 平安京条坊復元と 検出された礎石ライン	34

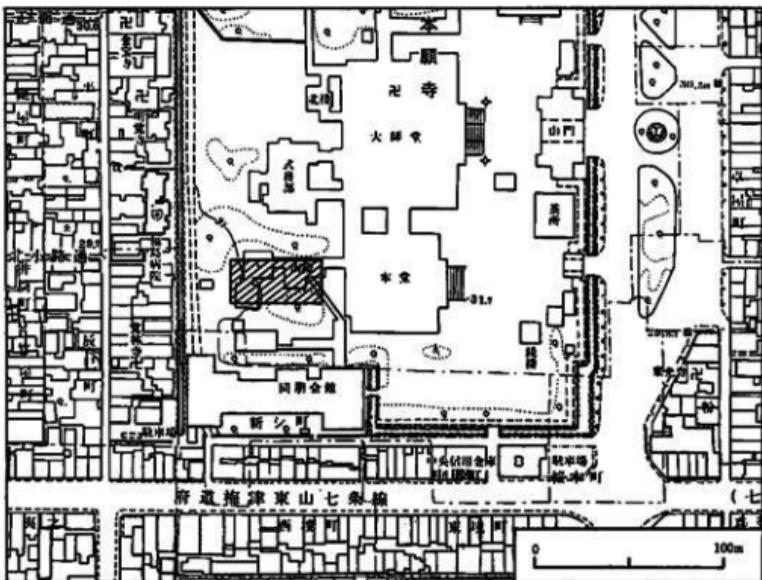
## 例　　言

1. 本書は、平安博物館が、株式会社大林組の委託を受けて実施した、東本願寺研修道場新築敷地の発掘調査報告書である。
2. 執筆分担は下記の通りである。

はじめに、第1章、第2章1)～17)，第3章，  
おわりに……………寺島孝一  
第2章18)……………植山 茂
3. 基準点の設置は、(財)京都市埋蔵文化財研究所にお願いした。
4. 本書の編集は寺島が行った。

## はじめに

東本願寺では、本堂(阿弥陀堂)の裏手(西側)に研修道場の建築を計画された(第1図)。この地は平安京内に位置し(左京七条三坊五町)周辺のこれまでの発掘調査の結果からも、平安時代～室町時代の遺構が検出される可能性が強いと考えられた。このため京都市埋蔵文化財センター(所長 浪見 稔氏)は、建築工事に先だって予定地内の試掘調査を行った。



第1図 発掘調査地位図(斜線部分)

その結果、予定地内のはば全域に涉って鎌倉時代～室町時代の遺物が検出されたため、建築予定地全面の発掘調査を実施することとなり、平安博物館がこれを担当することになった。

発掘調査の体制等は次の通りである。

調査依頼者 東本願寺

株式会社大林組

調査主体者 平安博物館 館長 角田文衛

調査担当者 寺島孝一(主任), 片岡 肇, 水口 薫

調査補助員 清流 龍, 山浦 修, 上杉英世, 宇野克実, 森脇清隆, 津田美貴子, 酒井彰子,

須原久美子、大西敦子、出口瑞鳥、小山知佐子、植岡美矢、西村典子、山村恵美、他

作業員 向日市 橋本庄次、橋本俊夫、安田秀男、吉田龍太郎、五十嵐彰雄、木村謙次、  
山中貞男、三浦信一、田中義春、古前健次、安田美代治、他

調査は昭和59年4月19日から6月30日までの3ヶ月に渡って実施した。調査は新築敷地内に  
あった宝蔵の移転工事と併行して進められた。この移転工事が難航したため、作業の進行に若  
干の支障をきたしたが、ほぼ予定の日数で終了することが出来た。

尚、調査地の国土座標設定に関しては、(財)京都市埋蔵文化財研究所の御世話になった。  
驚く御礼申し上げる。

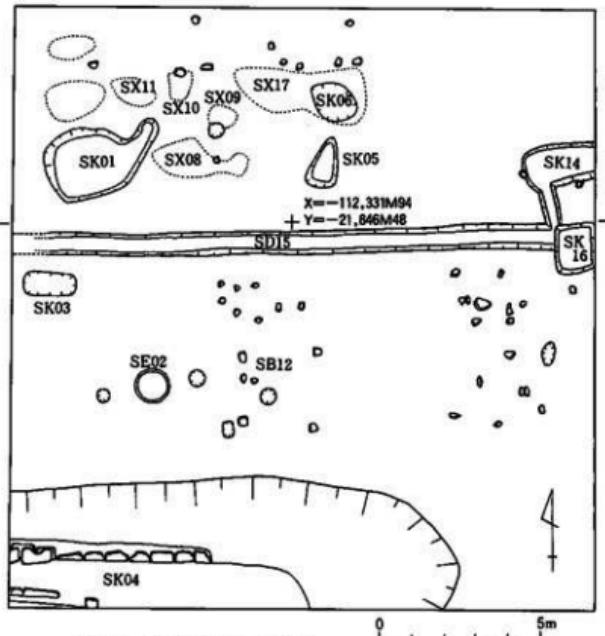
## 第1章 調査の経過

発掘調査に先だって行った試掘調査の結果、表土下1.5~2mほどは江戸時代以降の土層の堆積が観察された。このため、この部分については重機(バックホー)による掘削を行うこととした。

調査地は、東西約38m、南北約20mであったが、このうち西半部分には、宝蔵が建てられていた。新しく建築する研修道場は、この宝蔵を移動して、その跡地に建設する事となっていた。しかし、発掘調査に着手した段階で、宝蔵が敷地外に移動できていなかったため、東半部分をまず調査し(A区)、宝蔵の移動完了後西半部分(B区)の調査を行うこととなった。

### 第1節 A区の調査

A区は東西18m、南北18mのほぼ正方形の調査区である。重機による掘削の後、手掘りによって安定した面の検出、清掃を行った(第1検出面、第2図)。



第2図 A区第1検出面実測図

この面では、まず南端で東西にのびる堀状の造構を検出した。この堀状造構は調査区の更に南に続くため北側部分の肩のみしか検出できなかったが、この部分では約6mに涉って花崗岩の石組を確認している。用いられていた石材は長さ50~80cm、幅30cm、厚さは15~20cmであった。検出したのは最下段の一段のみであったが、更に上方に積み上げられていたと考えられる。石の背後には裏込めの小礫がつめられていた。堀の幅は不明であるが、調査区内で1.5mはあり2m以上はあったものと推定された。石列の検出は9個・6.3mであったが、堀の掘り方自体は更に東方にのびており、これによればA区内で長さ10.5m以上になると考えられる。東端で掘り方は南に屈曲しているため、この堀はA区ほぼ中央で南に下っていたものと考えられた。さらにこの堀はB区にも続くものである。堀内からは木器類、陶磁器類が大量に出土しているがこのうち、裏面に「嘉永二年」(1849)の墨書きが見られた(第33図)。この堀の使用された時期の一端を示すものと言えよう。

A区ほぼ中央からやや北寄りには、東西に走る溝が検出されている(SD13)。この溝の幅は約80cmで、検出面からの深さは20~25cmであった。溝底部のレヴェルは東が高く、西に向って低くなっていた。ただし調査区西端付近では、溝の輪郭は不明確になっており、更に西方に続くものかどうかは定かでない。溝内からは室町時代後期の土器類が出土している。

中央部やや南寄りでは東西・南北とも柱間一間の建物の礎石が検出されている(SB12、第13図、図版第2一下)。1辺は西面する柱間が2.15mとやや狭く、他は2.3のやや台形がかた正方形を呈していた。

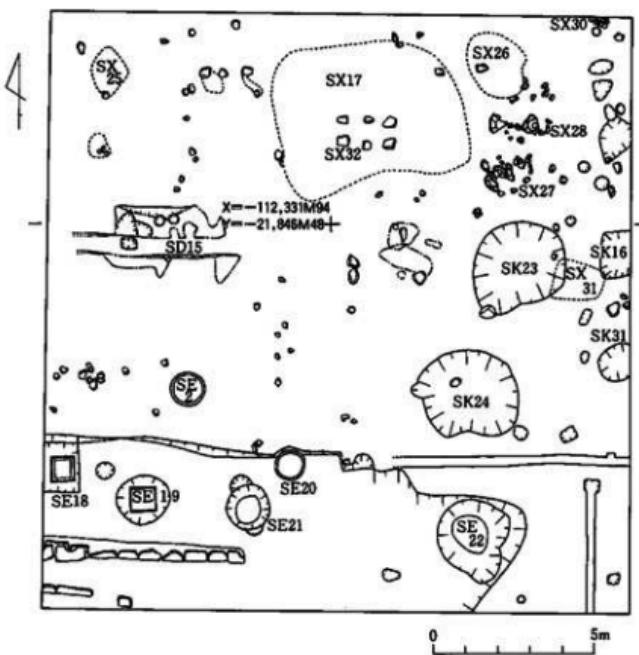
またこの建物の西方で、江戸時代の円形の井戸を一基検出している。

中央部から北部にかけては、不定形の土壤をいくつか検出した(SK01・03・05・06・14)。いずれも江戸時代のものと考えられた。

またSD13の北側で拳大かそれ以下の礎を集めた集石造構の表面が確認されている(SX7~10他)。いずれもほぼ円形~橢円形を呈するもので、直径1~2mほどのものであった。集石内から出土した遺物としては、瓦・土器類等があるが、いずれも室町時代後半のものと考えられた。

第1検出面から更に30cmほど掘り下げたところ、比較的安定した面が得られたため、これを第2検出面とした(第3図)。

この面では、まず北部に大きな集石造構が認められた(SX17)。この集石は東西約6m、南北約4mで、拳大ないし、それ以下の小礎を比較的密に配したものであった。この集石のはば中央の下層には、東西2.3m、南北1.3mの長方形の掘り方が検出されたが、この土壤の内部には、拳大の礎がぎっしりとつめられていた(SX32)。この土壤の下層では、上面を水平にした礎が、東西に3個づづ2列が置かれていた。各々の礎間の芯-芯距離は、東西両端で1.5m、南北の礎間で約60cmであった。いずれの礎も、上面が水平を保っていたことから、この上に何かを埋納し、周囲に礎をつめ込んだものと推定されたが、木材等の痕跡は認めることが出来なかった。



第3図 A区第2検出面実測図

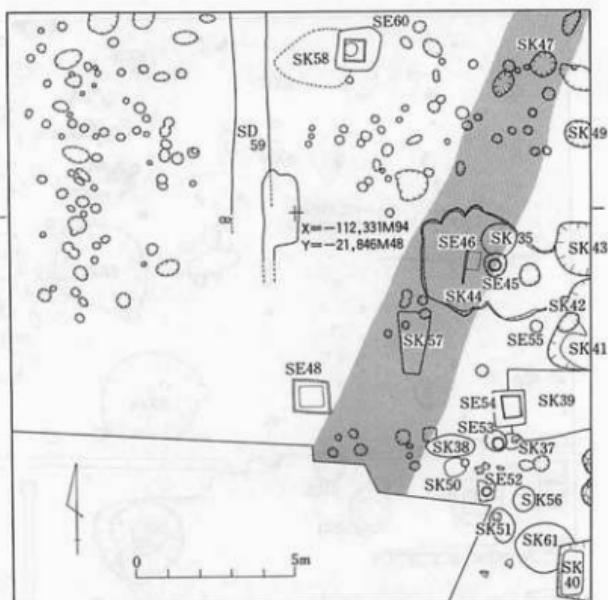
この砾群の東側に位置して、大甕の底部が据えられた状態で検出されている。2～3個体が確認できたが、いずれも土圧で細かく割れていた。口縁部等が発見出来なかつたため年代の決め手に欠くが、周辺から発見されている土器等からみて、室町時代前半のものと推定した。

また、この周辺からは羽釜も3～4個体、据えられた状態で発見されている。骨等の痕跡は認められなかったものの、集石や大甕片との関連から、火葬墓と考えるのが妥当であろうと判断した。

SX17等の集石の下層からは、敷地の北端近くで、東西に並ぶ礫石群を検出している。この段階では明確に東西に続く礫石とは認定できなかつたが、この段階で検出された礫石の更に下層で、明確に東西に連なる礫石群を検出したため、何らかの建造物を建て替えたものと判断した(第9図)。

調査区南側の堀(SK04)の裏込をとり外したところ、数基の井戸(SE18～22)が検出されている。いずれも残りは極めて悪かったが、SE18・19は方形の木枠を持つもの、SE19・20は円形の曲物を伴った井戸と考えられた。

地山面での検出遺構群を第3検出面とした(第4図)。



第4図 A区第3検出面実測図

この面ではまず、北東隅から南々西にのびる自然流路を検出している。この流路はごく浅いもので、肩なども判然としながら、幅は北東部で約2m、南端で約2.5mであった。底部のレヴェル差は、約15cmで、約12mの長さの割には、傾斜のゆるい流路と言えよう。この流路及び周辺では、土馬、ミニチュアのカマド等を検出している。

またこの流路内及び周囲には鎌倉時代の井戸が多く掘られていた(SE45・48・54・60等)。平安時代前期の流路を踏襲した水脈が、井戸の形成に影響を与えたものと考えられる。

中央やや西側では南北にのびる溝を検出している。幅は約1m、検出面からの深さは約10cmで、溝の底部は南に向ってやや傾斜している。この溝は調査区中央部で不鮮明になり、以南では確認できなかった。

また北辺一帯、特に北西部で柱穴と考えられるピット群を大量に検出している。このうちには、柱根の残るものもあり(図版第17一下)、掘立杭の建造物が建てられていたものと考えられたが、整然と配置できる柱列としては確認できず、建物の規模や軒数などは確認できなかった。

また、調査地東南隅では、大甕が2個併んで埋納されていた。掘り方のラインは、この2つの甕が同時に埋められた事を示しており、第2検出面で見られた集石や埋め甕と同様、遺体の

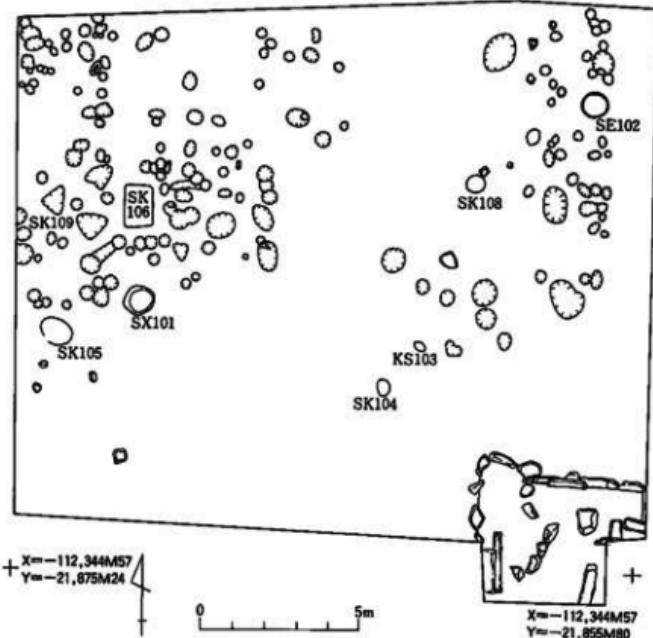
埋葬に関連したものと考えられた。

## 第2節 B区の調査

B区もA区と同様、3面にわたって調査を行った。

まず第1検出面(第5図)ではA区南端で検出されたSK04壙の延長部分が検出されている。石列はやはり最下段のみで、石材及び各々の石の大きさ等はA区のものと同じであった。B区では、東西約3mで、A区の分とあわせると検出された壙の長さは、AB間の畔の長さも含めて、15m近くになる。この壙は東端で南に屈曲したように、西端でも南に屈曲していた。屈曲部分は既に破壊されていて、移動した石材が4~5個認められたのみであったが、南北方向の石材が2段に積まれて検出されたため、南に屈曲すると考えた。全体として、東西に走る壙が一部突出した部分を検出したものと考えられるに至った。江戸時代の東本願寺境内に造られた壙の一部であろう。

調査区西部ほぼ中央で、底部に穿孔のある大型を用いた井戸状の遺構を検出した(第30図)。



第5図 B区第1検出面実測図

## 8 第2節 B区の調査

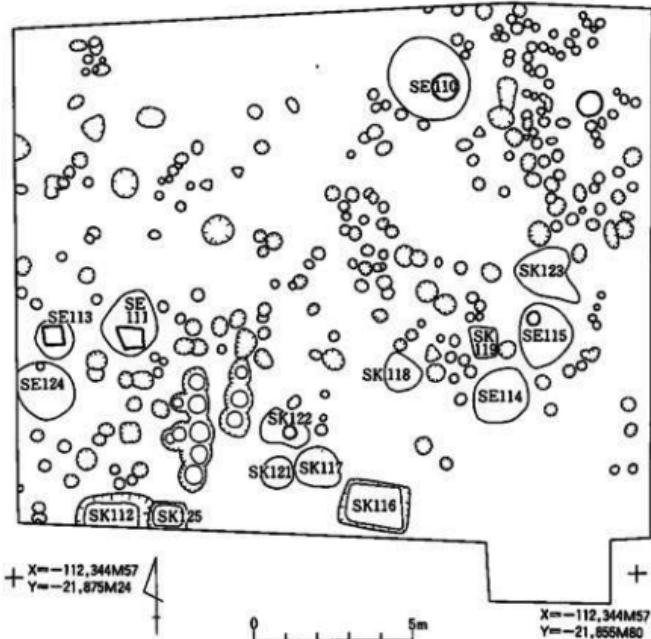
最下部に体部中央より上を打ち欠き、底部を穿孔した大甕を用い、その上には円形に石積みを行っている。用いている石材の中には、石臼も含まれていた。

東北部及び南北部では多数のピットを検出しているが、時期や性格は不明であった。

第2検出面(第6図)では多数の井戸を検出している。これらの井戸の大半は、方形の木枠を持つ鎌倉時代のものであるが、やや時期の下るものとして、立板を11枚円形に配した構造の井戸(SE110)などもみとめられた。

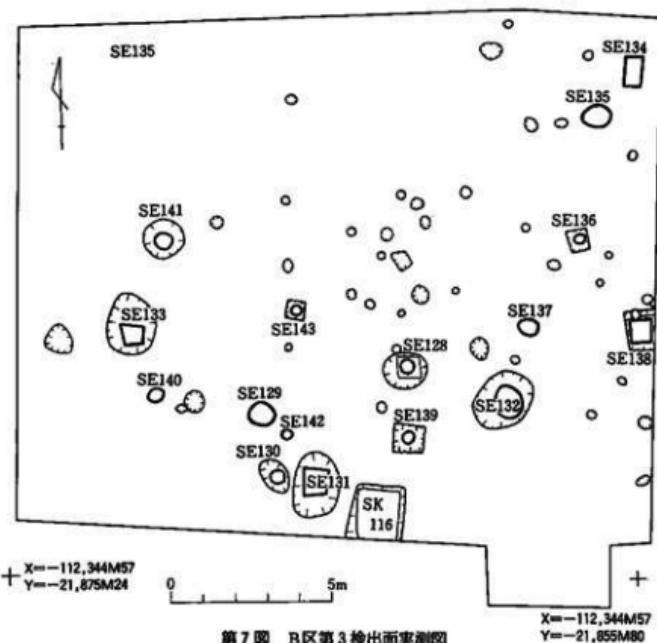
この面においても、多数のピット群が検出された。性格は不明なものが多いが、掘り方の中に上面を平坦に掘えた明らかに礎石と考えられるものも認められている。しかし、いずれも整然と配されたような関連は認められず、A区第3検出面と同様に、建物の配置や規模を推定できるものではなかった。

第3検出面においても新たに多数の井戸を検出している(第7図)。この面で新たに発見された井戸としては、SE128以下14基がある。いずれも鎌倉時代～室町時代前半のもので方形の木枠のみをもつもの(SE131・133・134・138等)と木枠と共に下部に曲物を持つもの(SE128・136・139等)がある。また曲物のみが発見された井戸(SE130・129・140



第6図 B区第2検出面実測図





第7図 B区第3検出面実測図

等)もあるが、全体に井戸の木質部の腐食が激しく、本来方形の木枠が上方に設けられていたものと考えられた。

他にピットが多く検出されたが、いずれも性格を規定するには至らなかった。

B区の調査の最終段階で、A-B区境界の畔を外し、畔下部分を調査したが、意味不明のピット以外、見るべき遺構は検出できなかった。

A区・B区を通じて、今回の調査で検出された主要な遺構は次の通りである。

- 1) A区東側で検出した自然流路
- 2) A区北側からB区東部にかけて検出された東西に並ぶ礎石列
- 3) A区北側で検出された集石群及び大型・羽釜群
- 4) 3)と関連するものと推定される内部に大きな砾を6個配した土壙(SX32)。
- 5) 鎌倉～室町時代の井戸
- 6) 江戸時代の堀跡

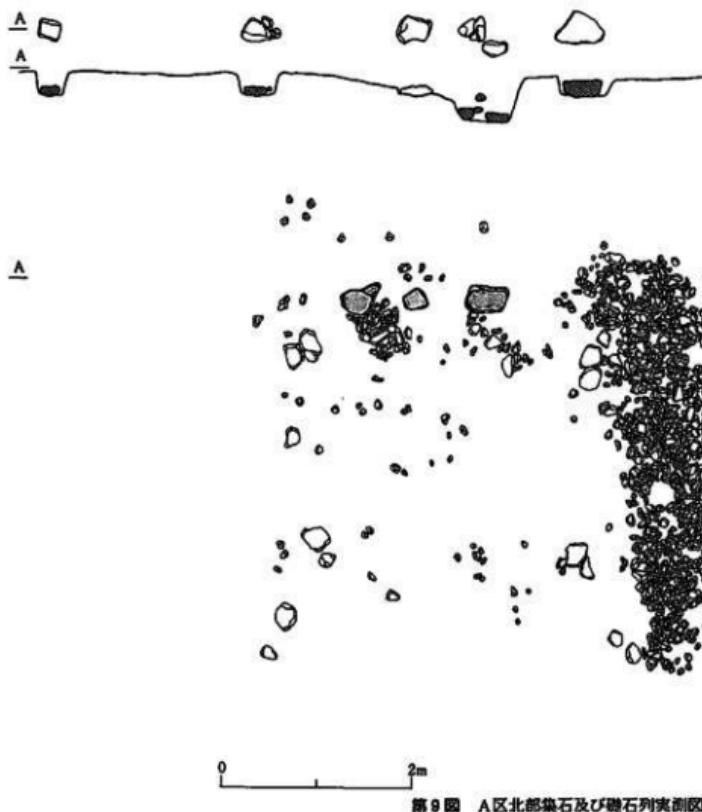
このうち特に2)については、平安京の条坊制とも関連するものと考えるため、第3章において、これまでの条坊復元図とも併せてその性格を考えてみたい。他の主要な遺構・遺物については第2章でふれることとする。

## 第2章 遺構と遺物

今回の発掘調査では、平安時代～江戸時代までの様々な遺構・遺物を検出している。井戸や土壙等は、平安京内の発掘調査で通常多く認められるものであるが、これら検出遺構のうち主要なものをとり上げて、遺構・遺物を紹介したい。

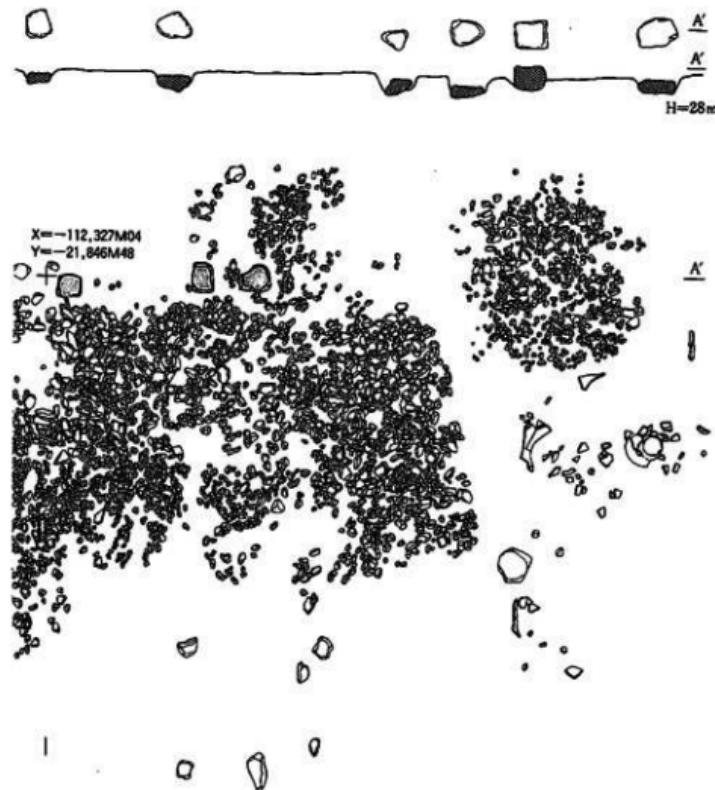
### 1) 磐石列（A区北側）（第9図）

集石群の下部で発見されている。集石直下で検出したものについては平面図に網をかぶせ示



第9図 A区北部集石及び磐石列実測図

し、更に下層で発見されたものについては断面図の上方に示している。礎石上面レヴェルは、下層のもので27M90~28mであった。礎石の大きさは様々で、小さなものでは1辺20cm程度、大きなものでは50cm近くと、かなり不揃いである。礎石の間隔についても、必ずしも一定するものではないが、下層の礎石列では11個の礎石がほぼ真東西に一列に配されていた。礎石間の間隔は狭い部分で70cm、広い部分で約2.3mであった。礎石は、素握りのビットにそのまま据えたものが多いが、根固めの石を配したものもいくつか認められた。この東西の礎石列は国土座標(第6座標系)でみればX=-112.327M04の位置にあり、(財)京都市埋蔵文化財研究所による条坊復元ライン(北小路南側築地芯)西側道路の町小路と接する部分でX=-112325.03、東側通路の室町小路と接する部分でX=-112324.53を結ぶラインと比較すると2m~2.5m南側に位置している。



礎石の配列が1列であること、条坊復元ラインの誤差が±3mと考えられていることを考えあわせると、北小路南側に築かれた築地の基礎となっていた石と考えられよう。ただし、この礎石列の北側、南側に、犬走りや溝等の造構は検出されていない。

## 2) 集石造構（第9図、図版第4）

上記した礎石列を被うような形で集石群が検出されている（SX17他）。最も大規模なもののはSX17で、東西約6m、南北約5mの範囲に涉って、拳大から人頭大の礎が敷きつめてあった。礎の堆積はさほど厚いものではなく、一重ないし、二重程度の堆積を認めたのみであった。SX17の東部には、規模の小さいSX28が検出されている。これは、ほぼ円形のプランを示し、礎の堆積はやはり1～3重程度であった。またSX17の西側にも、SX8～10等の集石が検出されている（第11図）。いずれも径1～2m程度のもので、SX17、SX28と同様にさほど密集した礎群ではなかった。

SX17の東側には、大甕、羽釜が据えられた状態で検出されている。大甕は底部のみが押しつぶされた状態で出土しているが、ほぼ2個体分が検出された。羽釜についても、1個が完形に近い状態で、正置された位置で発見された他は、底部の碎片がやはり正置の状態で、まとまって検出されている（第12図）。

集石、羽釜、大甕等の状況から、この付近が墓域として、鎌倉時代後半～室町時代に當なまれていたと考えることができる。

## 3) SX32（第10図、図版第4一下）

SX17の下層で検出されたもので、相互の位置関係から、まずSX32を造り、その上にSX17の集石を築いたものと考えた。SX32は、東西約2.2m、南北1.2mの掘り方を持つほぼ長方形の土壙である。SX17集石の直下から掘り込まれておらず、深さは40cm強であった。この中に、1辺20cm～30cmほどの礎を3個づつ、東西方向に2列並べている。そしてその礎の間を埋めるように小礎をつめ込んでいた。2列に並べた6個の礎の上面はいずれも水平を保っており、礎石あるいは何かを安置する台の役目を果していたと考えられる。このうち、礎石と考えた場合、柱間の間隔が狭すぎ、また、一つの土壙内に6個もの礎を並べる意味が無いと思われることから、何かを据える台の役目を果すものと考えるのが妥当と考えられた。また、土壙内からは数枚の北宋銭も出土していることから、木質片等の痕跡は認められなかったものの、木棺を安置したものであると考えたい。この6個の礎に木棺を安置するとすれば、その大きさは、長さ1.8m～2m、幅60～90cmほどのものが考えられ、木棺として幅がやや広すぎる感が無くもないが、ほぼ妥当な規模ではないかと考えられよう。これは上層のSX17、更に近辺にある墓域の様相と考えあわせても最も可能性の高い推定と思われるのである。

これらの集石内では、遺物の出土量は比較的少なかったが、摺鉢、青磁、綠釉陶器等が出土している（第13図）。第13図1は東播形の鉢で、13世紀後半のものであろう。3は龍泉窯系の



第10図 SX32実測図



第11図 SK01, SX8・9・11実測図

青磁でやはり13世紀後半～14世紀の年代を与えることが出来る。2の縁軸陶器のように、年代の古いものも出土しているが集石群全体としては、SX32で出土した北宋銭とあわせて13世紀末～14世紀代の年代を与えるのが妥当であろうと考えられよう。

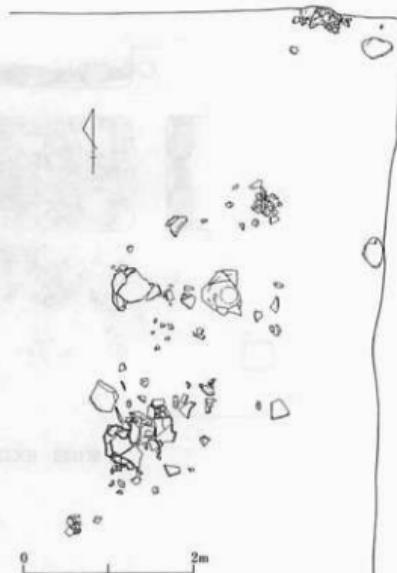
#### 4) SB12(第14図、図版第2-下)

A区集石群の南側で検出された建築構造である。4本柱の簡単な東屋風の建物の礎石であろう。礎石はいずれも素掘の柱穴に、根固めなどを行わず直接置かれている。芯一芯での柱間は北面で1.15m、南面で1.2m、東面及び西面で1mと、やや東西に長い形状を示している。礎石の大きさも、大きなもので1辺約15cm、小さなものでは10cm強の比較的小さなものを使っている。

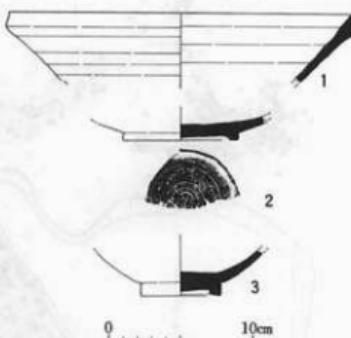
柱穴内及び周辺より出土遺物としては、土師器皿、摺鉢等がある(第15図)。土師皿は横田編年によるAタイプの14世紀代に比定できるもので、東播系の摺鉢も14世紀初頭と考えられるため、SB12の年代をほぼこの頃に置けると考えて良いであろう。SB12の北方で検出されている集石群と一体をなし、墓域の中に建築された何らかの建造物と考えて良いであろう。

#### 5) SE111(第16図)

B区で検出された方形の掘り方を持つ井戸である。井筒の上部は既に破壊されており、検出したのは最下部の木枠のみであった。残されていた最下段の桟木は、東面・西面のものがそれぞれ80cm、南面・北面のものが1.1mであった。組みあわせの方法などは、木質の腐食の程度が激しいため不明であった。中央部に曲物等



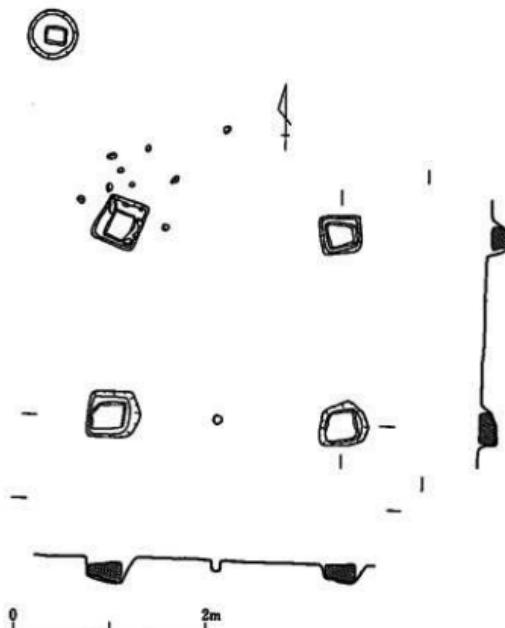
第12図 SX27実測図



第13図 A区北部集石内出土遺物実測図

の施設は作られていないかった。

井戸内からは土師皿・須恵質擂鉢などが出土している(第17図)。土師皿は大形のものと小形のものが出土している。大形のもの(第17図3)は、直径15cm強、高さは約3cmと推定される。口縁部分は2段ナデを施している。小形の土師皿(第17図1・2)は、直径約9cm、高さは約1.5cmである。東播磨の擂鉢(第17図4)とあわせて、この井戸の年代を12世紀代後半に求めることが出来よう。



第14図 SB12実測図

## 6 ) SE 52 • 53 • 54

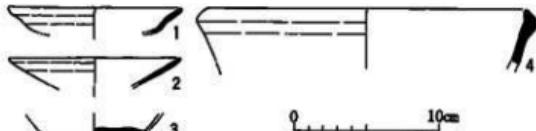
(第18図、図版第8-上)

A区南東部で互いに近接して発見されている。いずれも井筒部基底部分のみ残存するが、掘り方のみの井戸であった。

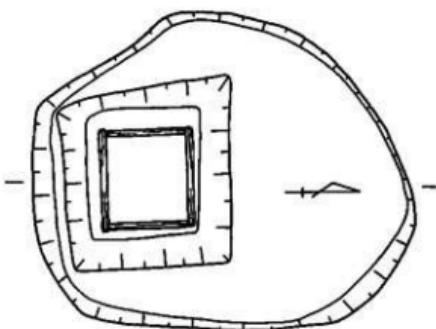
SE52は50~60cm程度の長さの板を横位に組み平面正方形としたもので、最下段の木組のみが残存していた。更に下方には直径40cm弱の曲物を埋め込んでいた。曲物の高さは27cmであった。遺物の出土量は少なかったが、土師皿からみて鎌倉時代前半のものと考えられた。

SE53は、曲物のみの残存する井戸で、上部の構造は不明であった。曲物の直径は約40cm、高さは50cmであった。

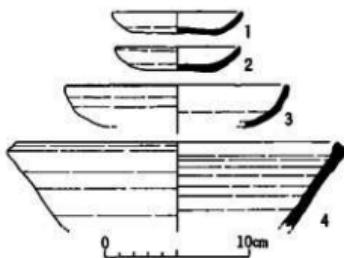
SE54は、掘り方のみを検出した井戸で、井戸枠かとも考えられる木片も検出したが、明確な構造は不明であった。掘り方から見て、方形の木枠を持つ井戸であろうと推定された。最下段における掘り方の規模は1辺70cm程度であった。



第15図 SB12出土遺物実測図



第16図 SE111実測図



第17図 SE111出土物実測図

められていた。方形木棒部分の検出面からの深さは約25cm、桶あるいは曲物の深さは17cmであった。

桶の部分からは完形のものを含めて瓦器塊が4点と、土師器皿が出土している(第21図)。瓦器塊はいずれも断面三角形の高台を貼りつけたもので、直径はいずれも15cm前後、高さは5cm強のものであった。内面には粗いヘラミガキ痕が、不定方向に認められる。外面上にもミガキは施されるが、数条のミガキが粗く施されているのみであった。

出土した土師器皿はいずれも小形のもので径10~12cm程度、深さは1.5cm強で、口縁は2段

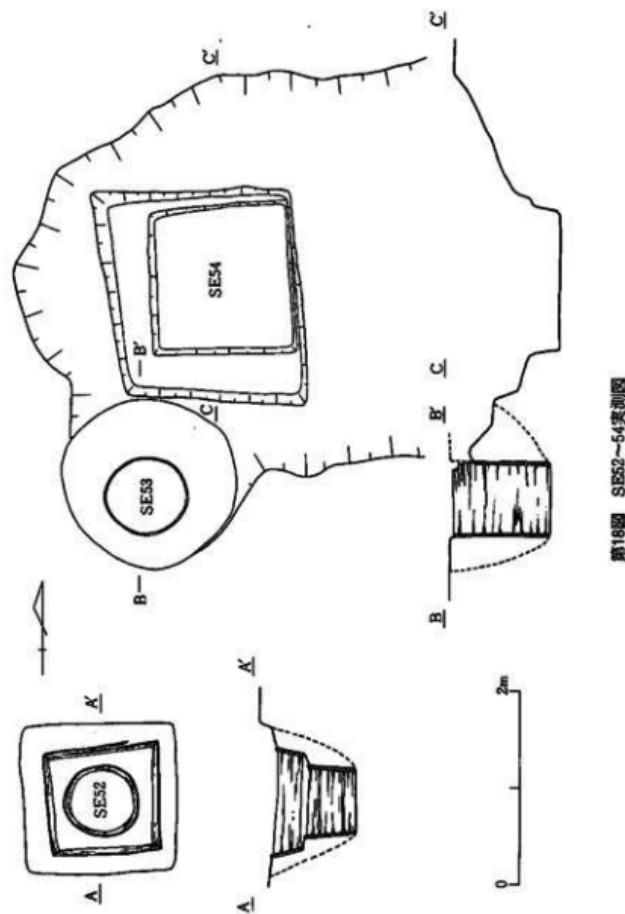
SE54からは土師器皿・青磁等が出土している(第19図)。土師皿は、「て」字口縁を持つ11世紀代のもの(第19図1・2)と、直径約9cm、高さ1.5cmほどの13世紀前葉に比定できるものの(3~5)の二種が出土している。青磁(?)ともあわせて、13世紀代の井戸と考えられよう。SE53もほぼこの時期と併行するものと考えられた。

#### 7) SE139(第20図)

図版第6)

B区で検出された井戸である。方形の木棒と、最下部に円形の痕跡を持つ構造である。木棒は、最下段の桿木のみが残存してい

た。用いられている桿木は長さ75cm~80cmで、互いに組み合わせて、やや東西に長い長方形の平面プランを持っていた。桿木に支持された緩板が本来あったものと考えられるが、全く残存していないかった。底には直径45cmほどの曲物あるいは桶が埋め込まれていたと考えられる。木質自体は全く残っていないかったが、桶に用いられたと考えられるタガの痕跡が僅かに認められた。また、桶の上面から木棒部分に至る平坦面には、1辺5~10cm程度の大きさの礫が散きつ



第16図 SES2~54実測図

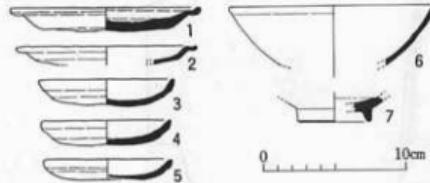
にわたるナデが施されていた。いずれも13世紀前葉に比定することが出来よう。

#### 8) SE143 (第22図)

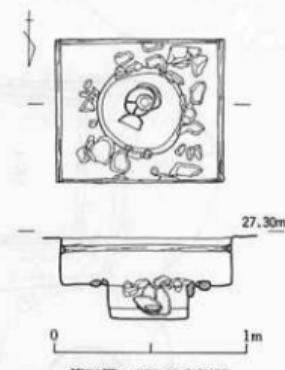
B区で検出された井戸である。不定形の掘り方の中に、円形の曲物を埋め込んでいる。曲げ物の直径は約70cm、曲げ物の検出面からの深さは35cmであった。上部には方形の井戸枠が存在したものと考えられるが、全くその痕跡は認められなかった。

SE143井戸内部からは、短頸壺、大甕片等が出土している(第23図)。短頸壺は口径約14

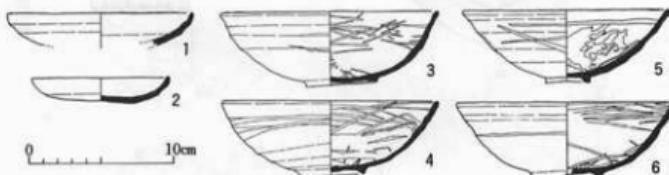
cmで、外面には黄褐色の自然釉が厚くかかっている。口縁部は体部とは別に成形され貼りつけられたもので、口縁下部内面にその痕跡が顕著に残っている。大甕は口縁部のみの碎片であるが、頸部外面には斜方向のナデ痕が顕著に残り、体部には細かい格子状の叩きが施されていた。胎土は精良で焼成は良好であった。



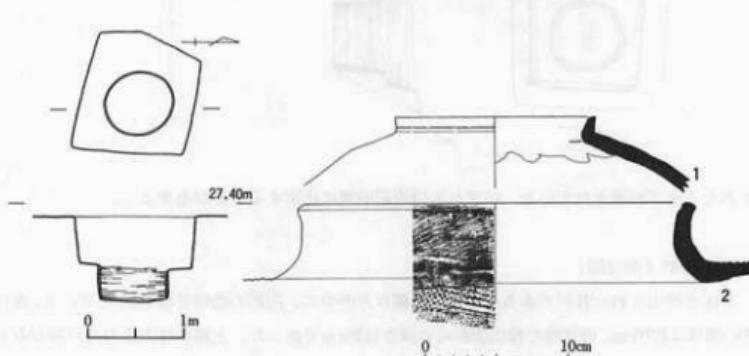
第19図 SE143出土遺物実測図



第20図 SE139実測図



第21図 SE139出土遺物実測図



第22図 SE143実測図

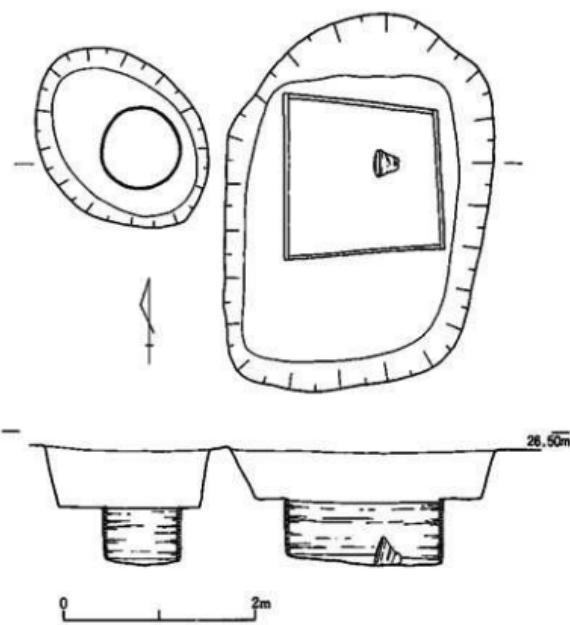
第23図 SE143出土遺物実測図

## 9) SE130・131

(第24図、図版第7-上)

B区で並んで検出された井戸である。SE130は、ほぼ円形の掘り方の底部に曲げものを埋め込んだもので、曲げ物の直径は約40cmであった。曲げ物の検出面からの深さは約30cmであった。

SE131は、方形の木枠を持つ井戸で、底部に円形の曲げ物などによる水溜りの構造は持っていないかった。木枠は、検出した状態ではやや不定形を呈していたが、ほぼ1辺が80

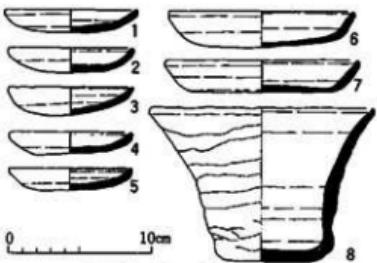


第24図 SE130・131実測図

cmであったと考えられる。検出面からの井戸の深さは約60cmで、このうち木枠(板を横位に置いて組み合わせたもの)の部分の深さは約30cmであった。

SE131の内部からは土師器皿と共に、粘土紐巻上げ痕をそのまま残した特殊な土師器が検出されている(第25図、図版第18-左)。この土器は、口径約16cm、高さ10.7cmで、口縁近くでラッパ状に広く形態を示している。まず、底部に粘土板を用い、その周辺部に太さ1cm強の粘土紐を巻き上げて器壁を形成している。底部近くは巻き上げた粘土の内外面からの押圧を比較的少なく、上にゆくに従って強く押すため、単位あたりの幅は器壁上方で広くなる傾向が見られる。口縁部は調整が比較的丁寧で、口縁部はユビでややつまみあげている。

土師皿は大小2つのセットで出土している。大は直径13cm~13.5cm、高さは2.5cmで、小皿は径9cm前後、高さ1.5~2cm前後のものである。横田編年のAタイプ13世



第25図 SE131出土遺物実測図

紀前葉～中葉に比定されている  
ものである。

#### 10) SE132 (第26図)

埋没後の土圧で相当の変形を  
しているが、円形の掘り方を持ち、  
その中に板を縦方向に円形  
に並べた井戸である。この井戸の木枠も腐食が著しく、全周に  
わたっては木質が残っておらず、  
ほぼ2分の1について縦板を検  
出したにとどまった。掘り方自  
身についても明確には判明しな  
かったが、ほぼ1.6mの円形と推  
定された。縦板による円形の木  
組井筒は、直徑60～70cm程度と  
考えられ、現存していた深さは  
約20cmであった。

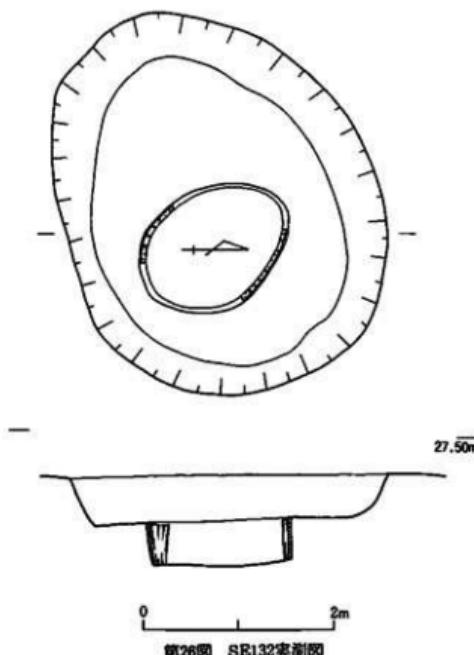
井戸内からは東播系の摺鉢、  
羽釜等が出土している(第27  
図)。東播系の鉢では第27図2のごとく、13世  
紀代の特徴を示すものもあったが、口縁が丸味  
を帯び、やや肥厚した14世紀代のものが含まれ  
ている。3の羽釜は受け口を有するタイプで14  
世紀代のものと考えられる。外面にはススの付  
着が顕著に認められた。

#### 11) SE113 (第28図)

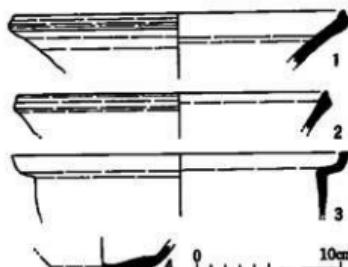
やはりB区で検出されている井戸である。掘  
り方のみが確認され、木質部分は全く残存して  
いなかった。掘り方から見ると、方形の木枠を持つ井戸で、一辺は80cmほどの木枠が用いられ  
ていたと考えられる。現存の深さは約80cmであった。

SE113井戸からは、須恵器壺口縁部と小形の須恵器皿が検出されている。(第29図)。

壺はラッパ状に口縁が開くもので、胎土・焼成とも極めて良好であった。復元口径は24.5cm  
である。



第26図 SE132実測図



第27図 SE132出土遺物実測図

小皿は回転糸切によるもので、胎土はやや砂を含み、焼成は硬質、淡灰土を呈している。

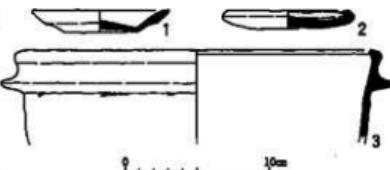
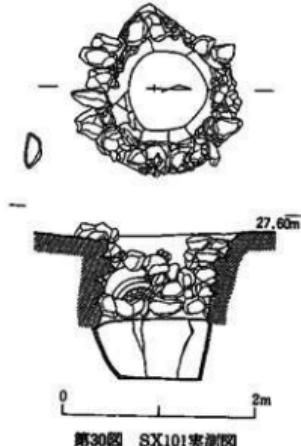
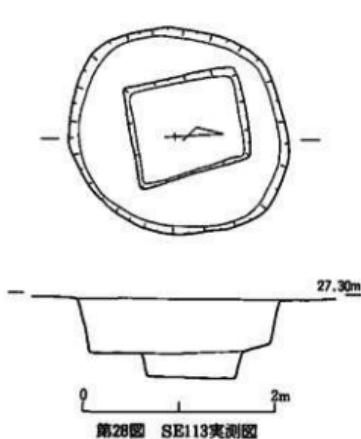
### 12) SX101(第30図、図版第11-下)

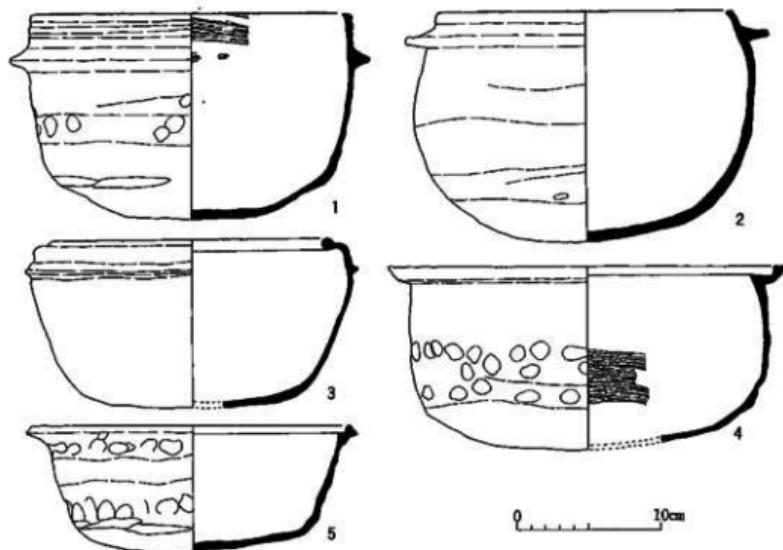
B区西部で検出された井戸状の造構である。検出面での直径が約1.2mで壁を円形に積み上げている。用いられていた石材の中には、石臼も含まれていた。検出面から約90cm下方まで石積が続き、更に下方は大甕の体部を壁に用いていた。その大甕の底部は打ち欠き、一見井戸状の構造を示している。

SX101内からは土師皿・コースター状土師皿・羽釜などが出土している(第31図)。土師皿はAタイプの15世紀中葉の特徴を呈するもので、この造構の年代の一端をうかがうこと出来る。

### 13) 集石造構周辺出土の羽釜(第32図)

A区北部集石付近からは羽釜が据えられた状況で3点(第32図1・3・5), 散乱した状態で数点が検出されている。このうちほぼ完形のままで検出されたものは3のみで、他は底部の



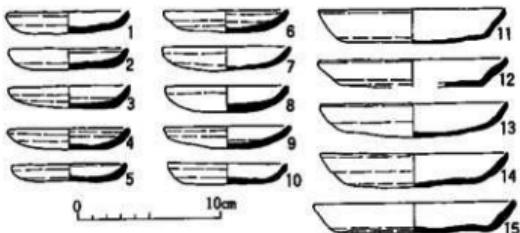


第32図 集石周辺出土羽釜実測図

みが現位置を保ち、上部は近辺に散乱している状態で出土している。いずれも本来煮たき用に用いられていたもので、底部から体部下半にかけては、炭素の付着が著しいものである。出土状態から、いずれも藏骨器として転用されたものと判断した。3がやや新しい様相を呈するが、いずれも鎌倉時代後半から、室町時代にかけてのもので、この付近の墓域の年代決定の一つの資料となるべきものと考えられよう。

#### 14) SK38出土土師皿（第33図）

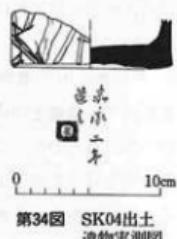
A区第2検出面で出土した小土壙で出土した土師皿である。大小2つのサイズがあり、大は、直径13~14cm、深さ2.2cmほどである。小は直径8.5cm前後で、深さはほぼ1.5cmであった。13世紀前葉の褐色系土師皿の一括資料として良好なものと考え図示した。



第33図 SK38出土物実測図

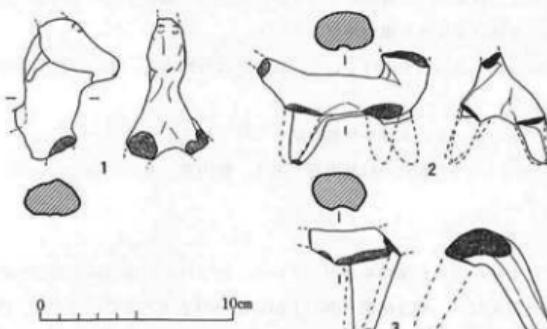
## 15) SK04出土墨書陶器（第34図）

A区からB区にかけての南部に検出された壺状造構内から出土した陶器で、外底面に「嘉永二年(1849)造之」の墨書と「日本」と読める押印が認められる。底部のみの碎片で全体の器形は不明であるが、花生のようなものかとも考えられる。いずれにせよ、この壺状造構の年代を知る上で一つの基準を与えるものと考えられる資料である。

第34図 SK04出土  
遺物実測図

## 16) 土馬・ミニチュアカマド（第35図、図版第20）

今回の調査では、A区第3検出面で認められるた自然流路の近辺で、土馬・ミニチュアのカマド等が検出されている。



第35図 土馬実測図

第35図1は、土馬の頭部で、目と頸のラインと手綱の一部が表現されている。現長は約7cm、頭長は4.8cmである。目は竹管状のもので、直径5mmほどの押印を行って表している。胎土には長石などの混入が見られ焼成はやや軟質、表面は赤褐色を呈している。

2は頭部及び尾の先端部を欠いているが、1とほぼ同じ頭部を持つものと考えられる。現長8.6cm、現高約6cmで、胴部の幅は約3cmである。粘土板を体部の正中線にそって折り曲げて整形したものと考えられ、腹部が折り曲げたように窪んでいる。クラ等の装飾は全く作られていない簡素なものである。1よりやや色調が淡く、淡褐色を呈するが、胎土・焼成はほぼ同工である。

3は、後脚と尾の基部のみの碎片である。現高5.7cmで、脚長は2よりやや長めである。2と同様に、馬具等の表出の無い、極めて簡素な土馬である。胎土に砂や礫の混入はほとんど見られず、焼成もやや硬質で、淡灰褐色を呈する。

図版第20-4はミニチュアのカマドの焚口部分で、B区の地山直上から出土している。現高は5cmで、胎土は砂等の混入がほとんど含まれられず良好である。焼成はやや軟質で、淡灰褐色を呈する。

これらの土馬・ミニチュアのカマド等の出土から、平安時代前期において、流路沿いに何ら

かの水に関する祭祀が行われていたものと考えられる。

### 17) その他の出土遺物（第36・37図）

これまで、造構と共に紹介した遺物以外に数多くの遺物が今回の発掘調査で出土している。そのうち主なものをここで紹介したい。

第36図3は須恵質の小皿である。直径8.3cm、高さ2.2cmで底部には回転糸切り痕を残している。7も須恵系の小皿で高台を貼りつけている。

8～12は瓦器塊で、断面三角状の高台を持つ塊(8～10)と、高台を持たない小皿がある。8・9の磨きは比較的粗で、レコード状の磨きがやや乱れたものである。11は比較的密にヘラ磨きを行っている。8・9は14世紀代、11は13世紀中葉のものと考えられる。12は、ヘラ磨きをごく僅かに施したもので、一部黒色を呈しているが、全体に灰白色を呈している。

15は受け口を持つ三足の盤で、体部から口縁部にかけては回転による調整を行っている。胎土には細かな砂を多く含み、全体に黒灰色～黒色を呈している。

17は壺の底部で、比較的張り出した高台をついている。19・20は短頸壺で、20には自然釉が付着している。

22は長頸壺の肩部の碎片であるが一条のタガを装飾に貼りつけている。

23～25・27～29・32～35は主として9世紀代の緑釉陶器である。畿内産のものが主であるが、一部東海産のものも含まれている。

第37図1～5は青白磁の合子である。

1は合子の身で、外壁には丸味を帯びた蓮弁を表現している。胎土はやや褐色味を帯びた白色であるが、さほど精良とは言えない。釉は体部外面の上から3分の2ほどまでに施され、内面には同じ釉が、外面に比べ薄く施されている。釉色はやや灰色味を帯びた青白色である。

2はやや大形の合子の蓋で、復元後約8.5cmである。上面にはやはり蓮弁の文様を比較的平坦に表出している。釉調は1よりやや明るく、青白色～白色を呈する。

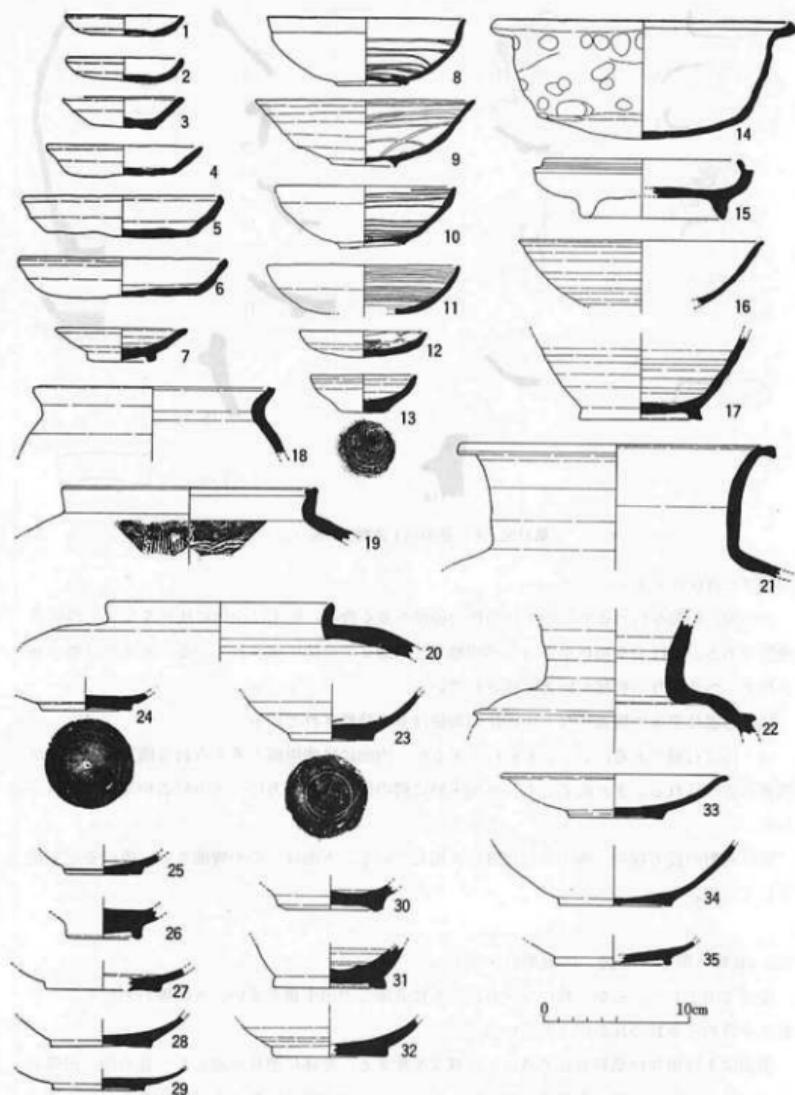
3は受け口を持つ合子の身で、全体に白色を呈する。胎土も精良で若干の混入物を含むものの、ほぼ白色を呈している。

4は押印による草花文を上部に持つ蓋で、側面にはやはり蓮弁を表現している。胎土はほぼ純白で、極めて精良である。釉は外面に厚く施され、青白色や白緑色を呈している。また内面中央部分にも釉が施されている。

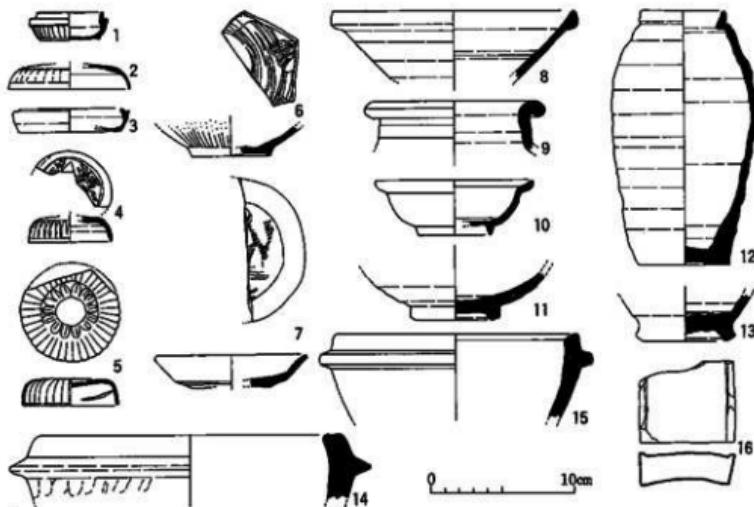
5も合子の蓋で、直径6.7cm、高さ1.9cmとやや大形である。上面には蓮弁を表現し、さらにその周辺に、体部下端にまで及ぶ蓮弁文を表わしている。胎土はやや褐色味を帯び、釉はやや緑がかかった青白色を呈している。また内面上部にも釉が施されている。

7は同安窯系の皿で内面に描きの文様を施す。8は玉縁を持つ白磁で、胎土は黒色の細砂粒を僅かに含むが精良である。釉調はやや灰色味がかった白色である。

10は龍泉窯系の青磁小塊で、灰色の細密な胎土を有する。無文であるが、釉色は、やや緑味



第36図 その他の出土遺物実測図（1）



第37図 その他の出土遺物実測図（2）

を帯びた青灰色で美しい。

12は短かい頸を持つ壺で、胎土に黒色の砂粒を多く含む。胎土は全体に灰色を呈し、焼成は硬質である。釉はやや褐色がかった透明釉で、内面まで全体に施されている。底部には釉は施されず、ヘラ切りの痕跡が顕著に残されている。

他にも磁灶窯系の陶器片など中国産の陶磁は多く発見されている。

14・15は石鍋である。いずれも碎片であるが、内面には使用痕と考えられる横方向の押痕が顕著に認められる。また両者とも、外面・特に鉗の部位より下方にススの付着が多量に認められる。

16は石製の長方鏡で、海の部分は既に欠損している。下面是、やや弯曲させ、鏡の安定を良くしている。

#### 18) 瓦類（第38・39図、図版第21・22）

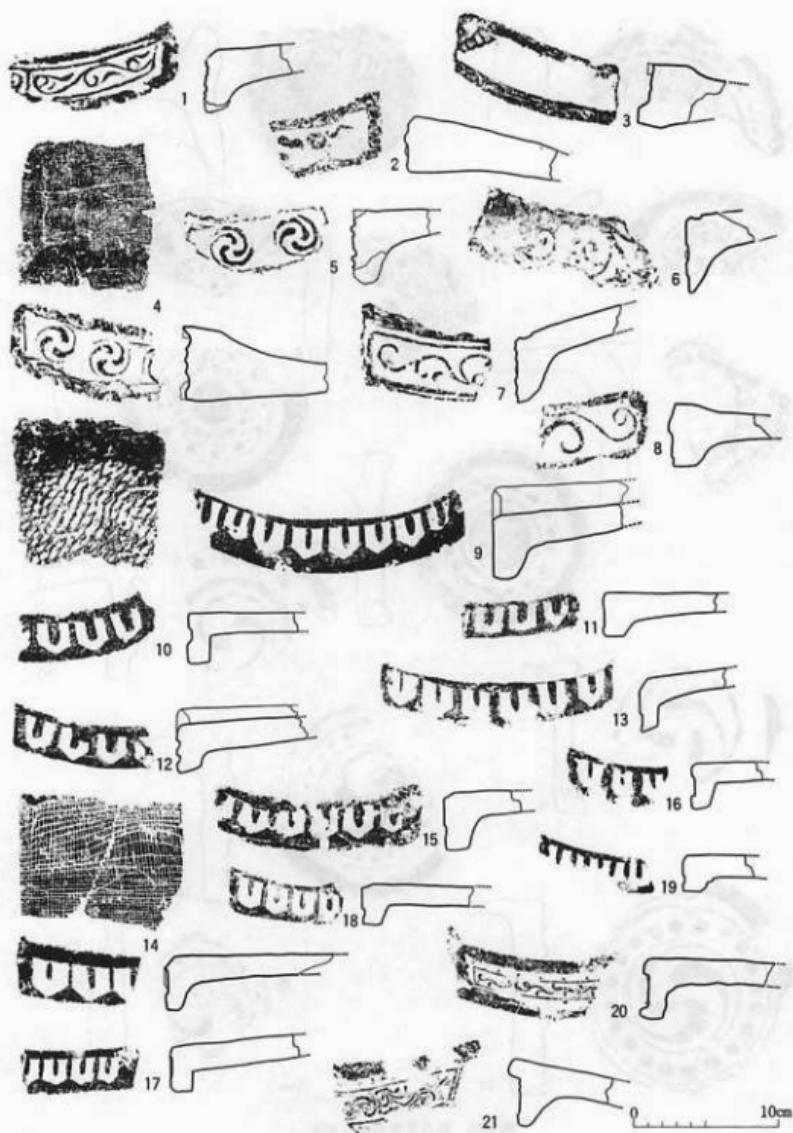
全域で出土しているが、特にA・B区とともに北部での出土量が多い。A区礎石列付近では、軒瓦を含めて多数の瓦が出土している。

第38図1は単弁14葉軒丸瓦で外区には珠文を配する。全体に磨耗が激しく、瓦当面の損傷も大きい。平安時代前期の西賀茂瓦窯産のものである。平安時代前期の瓦は軒平瓦も含めてこの一点のみで、他は全て中期以降の瓦であった。

2は単弁8葉蓮花軒丸瓦で、外区は調整の際のケズリで一部しか残存しないが、珠文が認



第38図 軒丸瓦実測図・拓影



第39図 軒平瓦実測図・拓影

められる。瓦当上方から筒部にかけては、縦方向のナデの痕跡が著しい。京都市森ヶ東瓦窯産のもので、平安時代中期末頃のものと考えられる。

3も単弁8葉蓮花文軒丸瓦であるが、各弁間に直線状の弁間文を配する。筒部凸面には縦方向の綱目痕が残っている。京都市幡枝栗栖野瓦窯の製品で12世紀後半のものと考えられる。

4も栗栖野瓦窯産の単弁8葉蓮花文軒丸瓦で、弁間文としては珠文を配している。胎土は比較的精緻で硬質である。瓦当面にはスヌ状のものが付着しており、使用中に火中したものと考えられる。12世紀後半のものであろう。

5は外縁を欠くが、単弁8葉蓮花文軒丸瓦である。瓦当の芯の損傷が認められ、中房の蓮子の一つが界線に接している。播磨産のもので、胎土・焼成ともに良好である。

6も播磨産で、複弁の8葉蓮花文軒丸瓦である。中房は1+8の蓮子で構成される。胎土は精緻で焼成は概ね硬質である。この軒丸も4と同じく、火中したと考えるように炭素の付着が顕著に認められる。12世紀代のものであろう。

7も播磨産の瓦である。複弁8葉で、中房は1+8の蓮子からなり、その周囲に藻を描いている。この瓦も火にあたったと考えられ一部に表面の酸化と炭素の付着が認められる。12世紀末の年代を与えられるであろう。

8は13世紀代に入ると考えられる複弁8葉蓮花文軒丸瓦である。中房は「卍」の文様を作り、外区の珠文は12個を配している。胎土には雲母片を多く含み焼成は硬質である。表面は全て黒色を呈している。

9は右巻きの三巴文軒丸瓦で外区に珠文は配さない。全体に炭化物の付着が顕著に認められる。平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

10も右巻きの二巴文軒丸瓦である。界線・珠文とも大作りで、これに比較して巴文の作り出しが小ぶりに見える。筒部との接合の際の支持粘土の量が極めて少ないので一つの特徴と言える。この軒丸瓦についても炭素の付着が顕著に認められる。9と同様に平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

11はほぼ完形の右巻き三巴文軒丸瓦で、鎌倉時代のものと考えられる。珠文は大きく、巴文の尾が長くのびて互いに接合し、界線風に作っている。この瓦も火中したものらしく、表面が酸化し、一部に炭素の付着が認められる。

12も鎌倉時代の作と考えられる右巻き三巴文軒丸瓦である。中央には珠文風の突起を一個作っている。外区の珠文はやや小ぶりである。全体に表面は赤色を呈しており、やはり火中したものと考えられる。

13は鎌倉時代～室町時代にかかると考えられる右巻き三巴文軒丸瓦である。文様の表出は極めて浅くなっている。

第39図は軒平瓦である。平安時代前期のものは無く、11世紀末～13世紀頃のものを主としている。

1は両辺から中央に向って唐草がのびる均正唐草文軒平瓦である。額部にはヘラ等によるも

のと考えられる縦方向のケズリ痕が認められる。平瓦部凹面に見られる布目痕が瓦当面にも一部認められる。11世紀末～12世紀初頭のものと考えられる。

2は讃岐産の唐草文軒平瓦で、火中したものらしく、表面はかなり痛んでいる。平瓦部凸面には縄目叩き痕があったものと考えられるが判然としない。11世紀末～12世紀初頭のものであろう。

3も讃岐産の半裁宝相花文軒平瓦である。平瓦部凸面には斜方向の縄目叩き痕が顕著に認められる。2と同様に11世紀末～12世紀初頭のものと考えられる。

4も讃岐産の巴文軒平瓦である。平瓦部凸面には粗い縄目叩き痕が認められる。側面は縦方向の、上・下両面の先端部は横方向のケズリ調整が施されている。12世紀代のものと考えられる。

5は右巻きの三巴文軒平瓦である。巴の文様はやや不定形の印象を与えるものである。胎土・焼成とも極めて良好で、12世紀代のものであろう。

6は京都市幡枝瓦窯産の扁行唐草文軒平瓦である。文様の押出しは比較的浅くなっている。12世紀代のものであろう。

7も京都産の唐草文軒平瓦である。瓦当面や側面の陵線はいずれもヘラ削り調整を行っている。この瓦も火にあたったものと思われ全体に赤褐色を呈し、一部に炭素の付着が顕著に認められる。

8も均正唐草文軒平瓦で右端部の碎片である。12世紀代の生産になるもので、やはり火中した痕跡が認められる。

9～19はいずれも剣頭文軒平瓦である。京都産のものが多いと思われ、年代は12世紀後半～13世紀に属するものである。このうち、12では中央飾りとして、シノギの部分に「×」印が認められる。他の瓦に見られるように、火中したと思われる炭素の付着や、表面の酸化の痕跡の認められるものがある。

20・21は鎌倉時代に属すると考えられる均正唐草文軒平瓦である。20・21とともに胎土に細礫の混入が極めて多く、焼成は概ね良好である。20には火にあたったと思われる痕跡が顕著に認められた。

全体に軒瓦では、半数以上のものに火にあたった痕跡が認められており、平安末～鎌倉期に大規模な火災があったことが推測されるところである。

### 第3章 北小路と条坊復元

今回の調査地は平安京の条坊制で言えば、「平安京左京七条三坊五町」にあたる。これは南に「七条大路」北に「北小路」、東は「室町小路」西は「町小路」に囲まれた一町で、調査地はその一町の東北隅部分にあることになる。

財團法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでの発掘調査で得られた平安京内各地の条坊関連資料を集成し、電算機で解析した結果、京の条坊の復元は3m以内の誤差の範囲内で、ほぼ確定することが出来るに至ったとされている。今回、同研究所の御好意により、その結果を今回の調査データと比較する機会を得た。

京都市埋蔵文化財研究所による条坊復元の座標は、この近辺では以下のようになる。

室町小路一北小路交点（南西角）

X = -112,2324.53 m

Y = -21,818.79 m

北小路一室町小路と町小路の中間点（南側）

X = -112,324.78 m

Y = -21,878.45 m

北小路一町小路交点（南東角）

X = -112,325.03 m

Y = -21,938.11m (第6座標系)

真北から0度14分ほどの振れを想定しておられるので、Xラインの数値は若干異なっているが、「北小路の」ラインはほぼ

-112,324.5m～-112,325 m

という復元がなされ、これが北小路の築地の芯ということになっている。

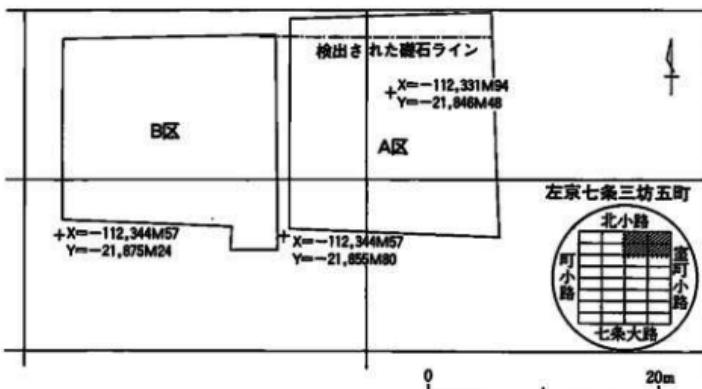
今回A区の北側で10個以上に及ぶ礎石をほぼ20mにわたって検出したが、このラインは

X = -112,327 m

であった。

これは、京都市埋蔵文化財研究所の「北小路」の推定ラインの南方2～2.5mに位置していることになる。

今回の調査で検出し得たのは、礎石列のみであって、北小路と推定される道路面、あるいは走行、溝等は全く検出できなかった。しかし1列で東西にのびる礎石列は、築地の芯柱と考えるのが最も妥当であり、また京都市埋蔵文化財研究所が、許容誤差としている3mの範囲に入っているため、この礎石列を「北小路」に面した邸宅の築地に伴うものと考えたい。



第40図 平安京条坊復元と検出された礎石ライン

この礎石列(幾度も建て替えられたと考えられ、同一レヴェルでも検出した礎石間の間隔が一定せず、また少くとも上下2層にわたって検出されている)が据えられた年代は判然としないが、礎石を被うように築かれていた集石造構の年代は鎌倉時代後半～室町時代と考えられた。このため、築地の残存した時期として、平安時代末～鎌倉時代前半の年代を与えて、さほど大きな誤りはないものと考えられよう。

この近辺については、平安時代末～鎌倉時代初期にかけて、源氏の邸宅が立ちならんでいたとされている。鎌倉時代後半～室町時代に入って、その勢力の衰退に伴って、やがて宅地は墓地へと変化していったものであろうか。集石造構は、明らかに礎石の北側にまで侵出しており、この時期には、北小路は道路としての機能も、いかほど果していたのか疑わしいと言った状況であったとも考えられるのである。

以後17世紀初頭、徳川家康によって、東本願寺の寺地として与えられるまで、この地はさほど利用されていた痕跡が認められない。そのことは、今回の調査で15世紀以降の造構・造物が極めて少なく、集石造構に象徴される墓地としての様相の次に、直接に東本願寺の造構(南側で見られた掘)が現われてくることからもうかがわれるのである。

以後、東本願寺の境内として、京内の調査でごく普通に見られる大量の江戸時代の井戸群や瓦溜等の工作を受けることなく、現代に至るまで地下の造構は眠りつづけているのである。

## おわりに

今回の発掘調査は、東本願寺境内における発掘としては最初の発掘にあたる。過去に烏丸線遺跡調査会の手によって、東本願寺前の道路部分の発掘調査が実施され、墓域的な様相を呈していることが確認されている。

今回の調査でも、やはり鎌倉時代後半から室町時代にかけて、調査地周辺に墓地が営まれていたことが判明した。東本願寺及びその周辺の残余の拡大な地域はまだ調査の手が加えられてはいないが、この2つの調査結果から考えて、少なくとも七条烏丸～町小路にかけての広い地帯に、墓地が形成されていたと考えるのはさほど無理な仮説ではあるまい。

今回の研修道場建設に伴う発掘調査は、僅か800㎡ほどの、小さなものであったが、この一帯の土地利用を窺う上では大きな成果があったものと考えている。

また、京都市埋蔵文化財研究所による平安京の条坊復元を追認する形で、北小路の南側築地に伴うと考えられる礎石列を検出することが出来た。平安時代～室町時代にかけての、この地の変化を理解できたことは一つの大きな成果と言えよう。

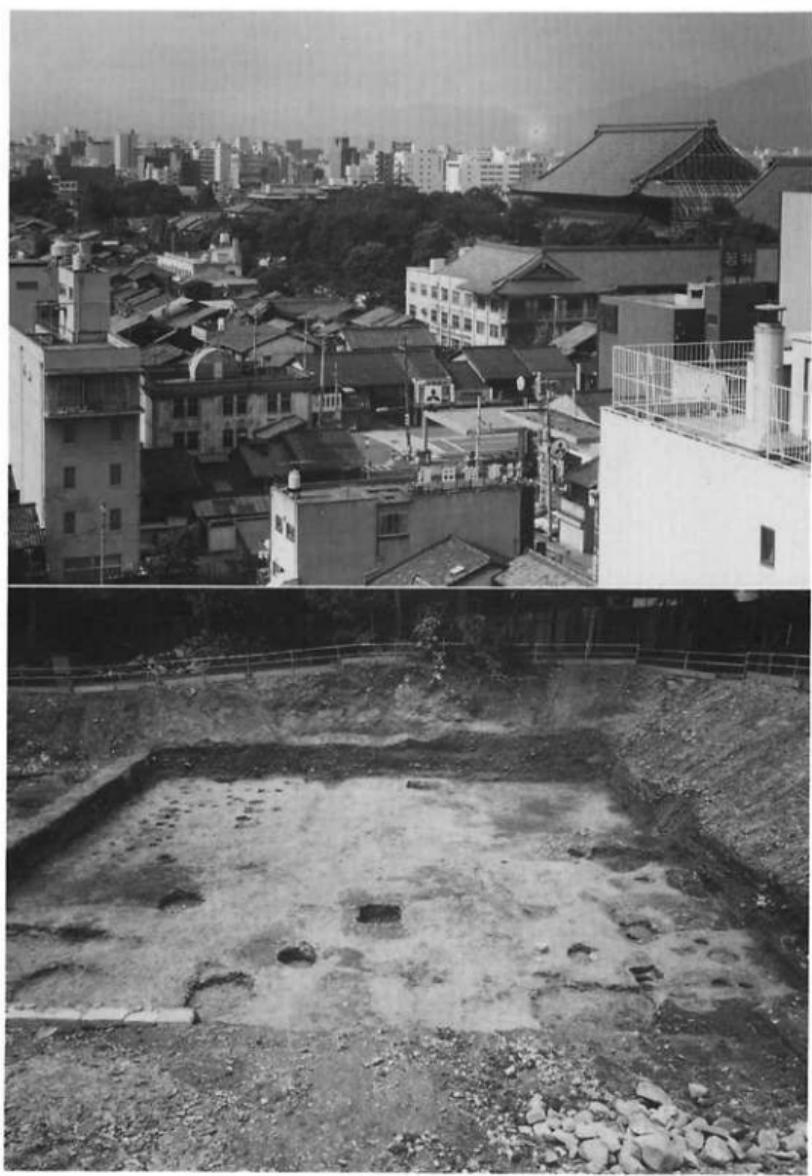
今回の調査では、他にも数多くの遺構・遺物が検出されている。筆者の怠惰のため、調査成果のごく一部しか報告できなかったことをお詫びしたい。

発掘調査中及び整理期間中、多くの方々の御協力と御援助を受けている。特に財団法人京都市埋蔵文化財研究所には、御多忙の中、国土座標の移設の手間をお願いした。また、条坊復元の貴重なデータを使わせていただいた。東本願寺及び御大林組には、長期にわたる調査期間及び費用の負担について御理解をいただいている。

本報告書が、曲りなりにもここに刊行の運びとなったのは、これらの各位の御助力によるもので、ここに篤く謝意を表するものである。

# 図 版

図版第1

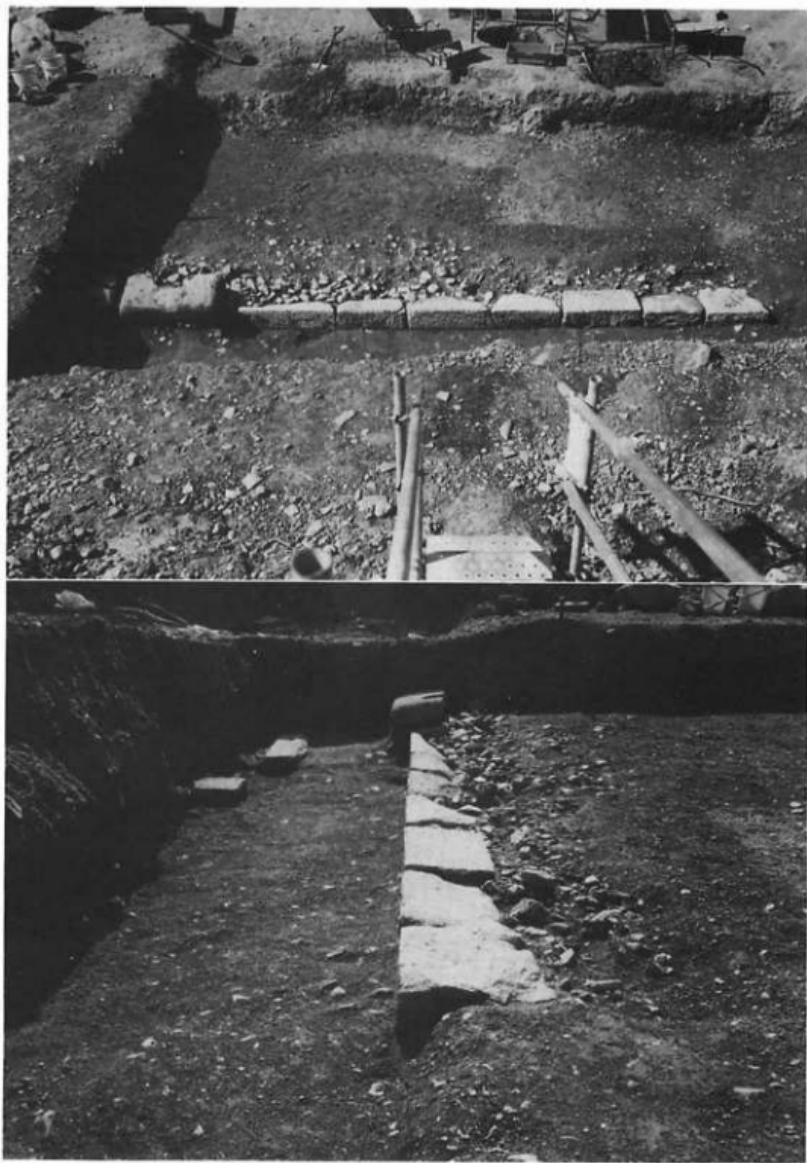


上：調査地遠景(南から) 下：A区調査後全景(南から)

図版第2



上：A区調査後全景(東から) 下：SB12



A区南側石列 上：南から 下：東から

図版第4



上：SX17・28 下：SX32・33



B区調査後全景 上：東から 下：東南から

図版第 6



SE139 上：全景 下：土器出土状態



上 : SE131 下 : SE138

図版第 8

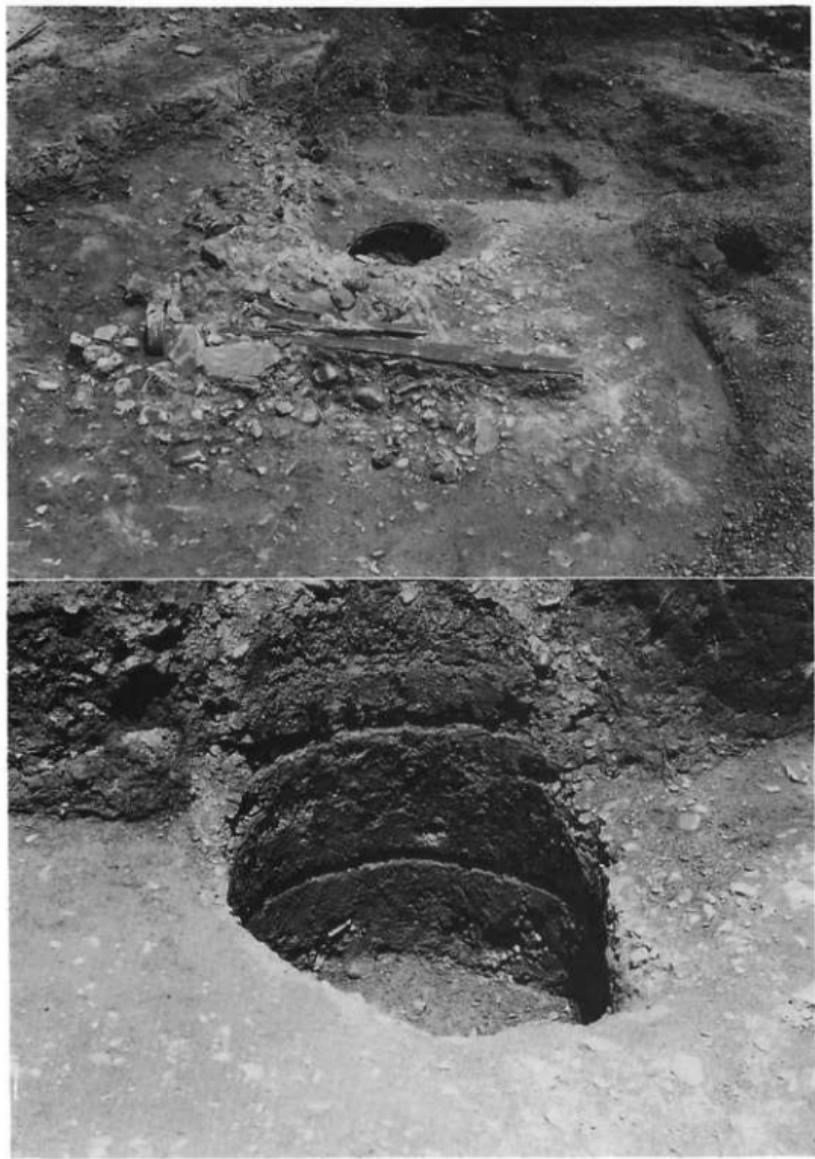


上 : SE54 下 : SE130



上 : SE48 下 : SES3

図版第10



上 : SK44, SE45・46 下 : SE20

図版第11

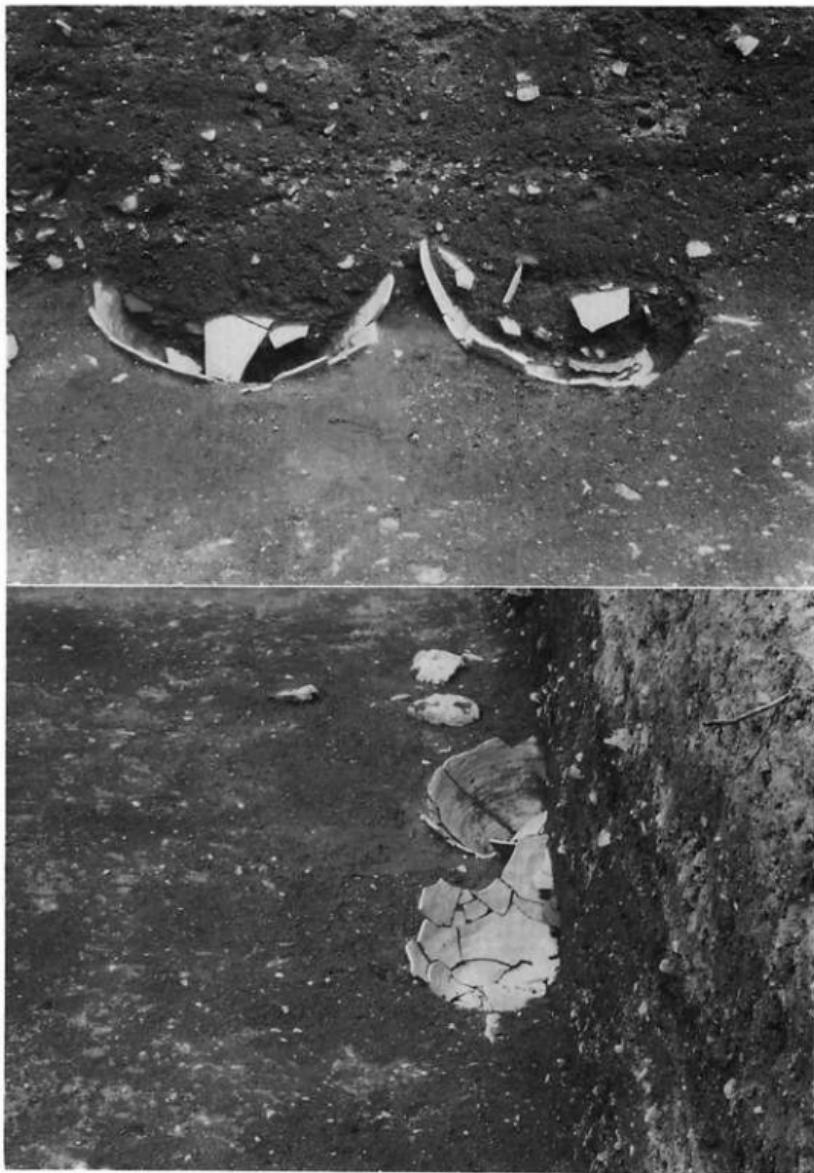


上 : SE110 下 : SX101

図版第12



羽釜出土状態



A区南東部大甕出土状態

図版第14



A区北部集石・大甕出土状態

上：全景 下：細部



上：SX28 下：SX33 瓦出土状態

圖版第16

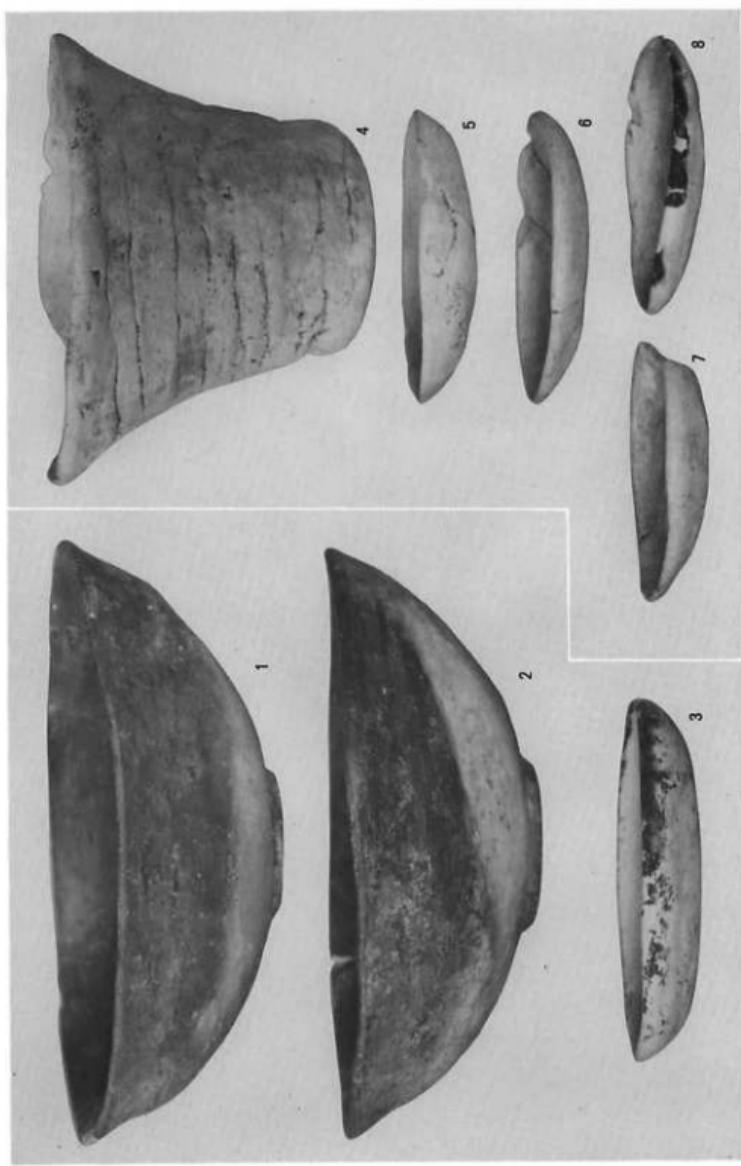


上：SK35 下：SK41

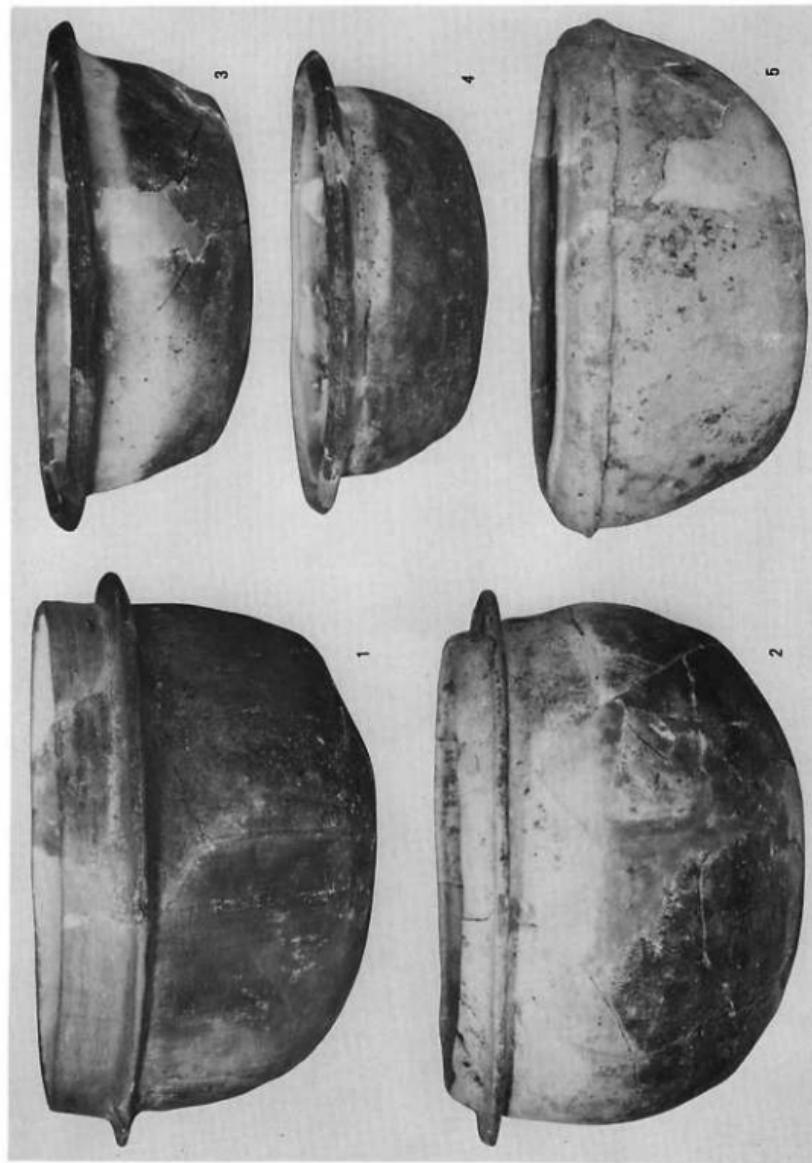


上：SK36土器出土状態 下：A区柱根出土状態

圖版第18

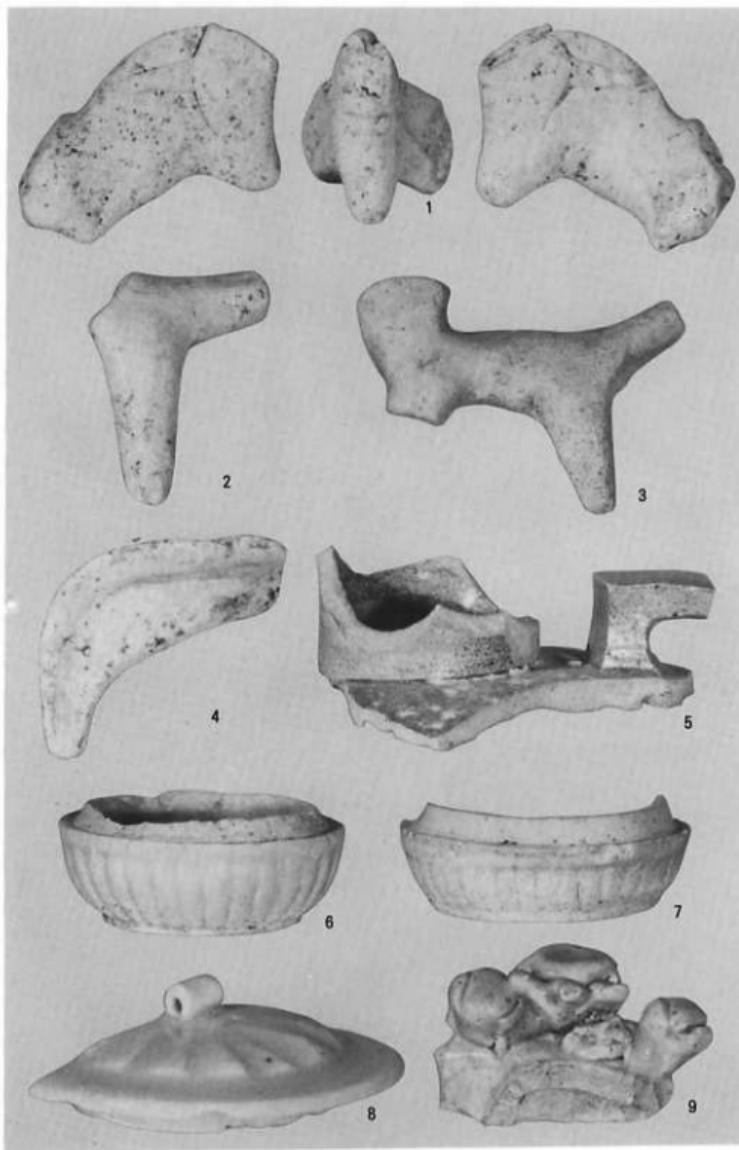


左：SE139出土遺物 右：SE131出土遺物

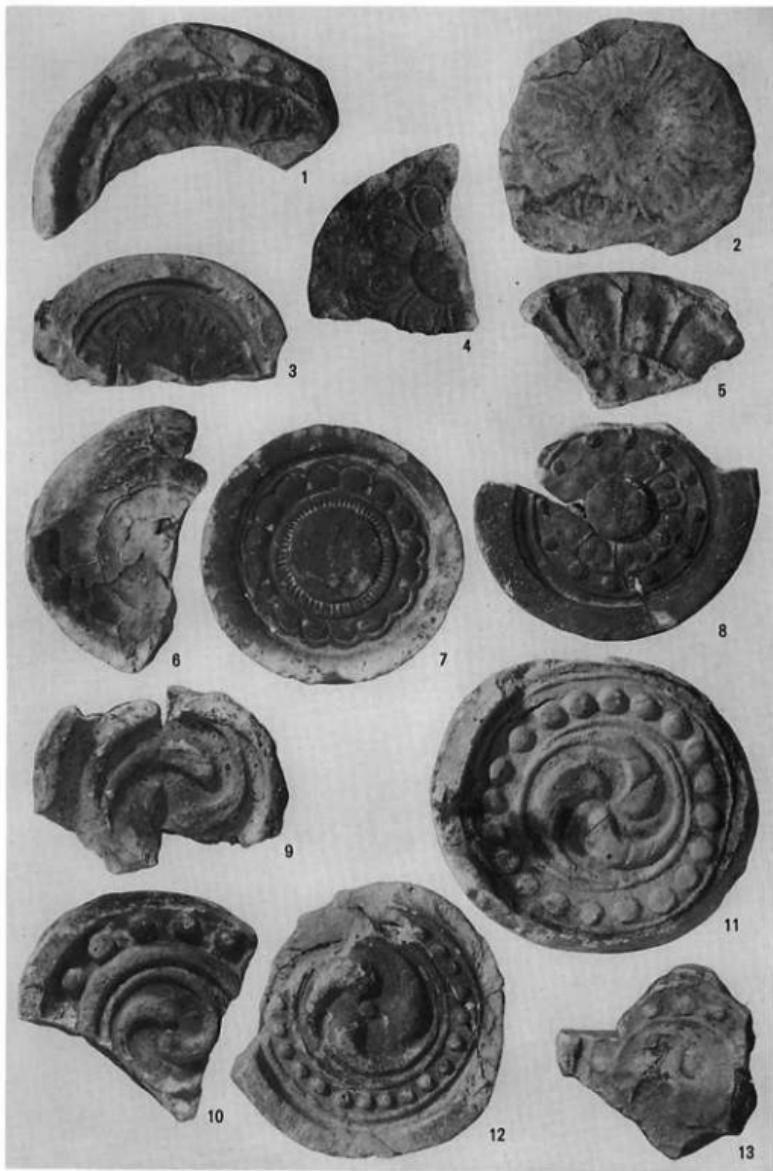


A区出土羽釜

図版第20

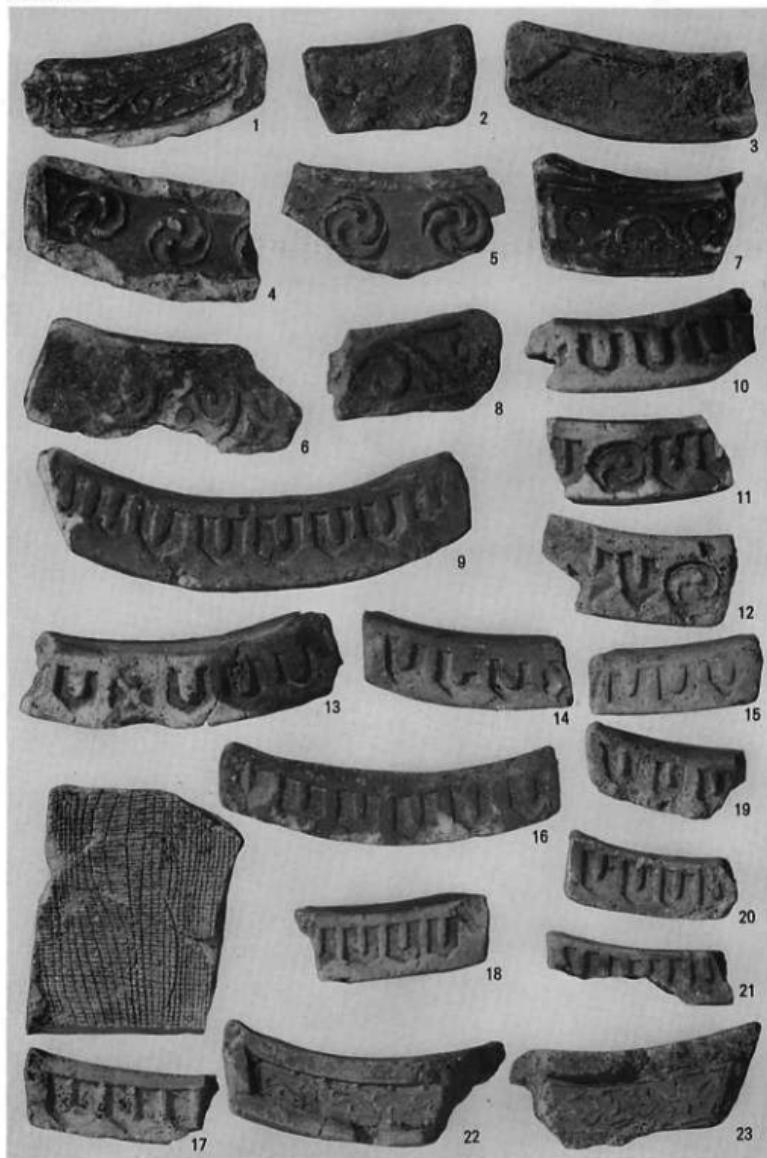


土馬・灰釉陶器・青磁



軒丸瓦

图版第22



軒平瓦

---

---

平安京跡研究調査報告 第15輯

平安京左京七条三坊五町

発行日 昭和60年3月31日

編集 平安博物館考古学第4研究室  
寺島孝一  
発行 財團法人古代學協會

604 京都市中京区三条高倉  
TEL. 075(222)0888  
振替京都8-850番

制作 ピクトリー社

604 京都市中京区油小路通船上ル  
TEL. 075(221)1420

---

---

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XV

EXCAVATIONS AT THE FIFTH  
INSULA, REGIO III, DECUMANUS VII  
IN THE PARS ORIENTALIS OF  
THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXV